

遠野より麦の霧雨



たけおか

永らくご無沙汰しておりました。覚えておいででしょうか、雪灯りと呼んでいた女にございます。突然の連絡、心より深くお詫び申し上げます。さぞ御戸惑いの事と思います。勿論あなた様と同じにこちらも二度と連絡するつもりはなく、一時の想い出より期待多く考えることなど決してございませんでした。その筈が学浅いばかりに、あなた様に頼る以外の道に思い当たりませんでした。この手紙を持たせたのは、私とあなたの娘です。まさかとは思いましたが、それ以外には考えられないのです。不躰ですが、しばしの間、娘を奉公させていただきたく、娘をやりました。名はメイ、と申します。詳しく記す暇なく、口足らずで申し訳なくも、どうか、短い間預かって下さればと思います。心静かなあなたに押し付ける様な形となり、口惜しい程申し訳なく思います。もしご承知いただけない時は、お手数をお掛けしますが月のない夜に澄んだ水気を散らし、人気のない木々の下に行かせていただければと思います。どちらにせよご面倒おかけしますがどうぞよろしくお願い致します。

「一」

部屋のドアを開け、荷物と食べ物が入ったビニール袋とレンタルビデオの袋を下ろした。そして明かりを点けようと伸ばした手元に、白くゆらりとこの手紙が落ちてきたのだった。

しばらく暗闇の中を靴も脱がずに立ち竦んでいた。その言葉は私を深い回想へと押し込んだ。寒い夜。鼻の触れる距離。白い女性の顔。薄く暗く靄のかかった脳裏で反芻した。雪あかりの女。耳が熱を持った。そう呼んだらう過去の自分に、私は照れるような気持ちになった。そして、意識が頭の底から上がり戻ると、口が動いた。

「娘……。私の？」自分の声を耳にした瞬間、私は冷ややかな感覚を捉え、目線を奥へとやった。暗闇の溜まる部

屋隅で何か動いた。

消墨色の世界を舞う黄色い目のウサギ、が大きく描かれた浴衣か着物が見え、その肩に横がかかる髪型の顔がぼんやりと見えた。小さな女の子が立っていた。

「君は」

―娘をやりました。

「メイ、さん……？」少女が小さく頷いた。

「君が……お母さんから私のところに預けられに来た……私の、むすめ……なのか？」

少女の顎がもう一度うなずかれた。「よろしくお願いします」

何も分かってないのに私の顎が一度、上下した。蒸す様な熱気が体を覆い、私の頭の中で渦をまいた。

忘れていた足の感触を確かめるように数歩進んだ。そして右手を左右に振り伸ばし、電灯の紐を探した。この状況をもう少し現実に繋げるために。

白い光が点灯し、部屋に広がった。飲み込むような小さな悲鳴が聞こえた。薄めた目を開くと、確かに目の先には少女がいた。少女は眼を覆っていて黒い髪が小さく揺れた。そのまま少女はうずくまり、顔を下にして崩れ落ちた。

私はしばらくそのまま立って眺めていた。そして、訳の分からぬまま素早く電気紐を引っ張った。

視界が闇に包まれた。

ようやく周囲の輪郭が見え始めても少女は動かかなかった。

私はとりあえず寝室へと向かい、敷いたままだった布団を整えた。そして少女をそっと持ち上げ、寝室へと運び入れた。少女の軽い体と麻生地の乾いた手触りだけが現実的だった。布団に寝かせ、薄いタオルケットを一枚被せた。額に手をやると、小さな水たまりと感じれるほど汗が出ていた。着替えさせたほうがいいだろう。私は半ばげのまま

コンビニに行き、男性用の肌着を三枚セットで買ってきた。

肌着はすぐに沢山の汗を含み、私がコーヒーを飲み一風呂浴びた頃には二枚目の肌着に着替えさせた。脱がせた肌着を洗濯機に放りこみ、コーヒーを入れた。

煙草を一本吸い終わり、コーヒーを持つて寝室へと入った。落ち着いたか、と近寄ってみると少女の荒い息が聞こえる。汗のひかない体に触れるとさつきよりも骨の感触が強くなっていた。痩せていつていた。私は困った汗をかき、とりあえずはだけていたタオルケットを被せ直した。すると聞こえる呼吸は次第に肩でするようになり、仕舞いには不規則にかすれたものになってきた。「あつい…」そう呟いたので、私は慌ててタオルケットを取り上げた。少女は目を瞑ったまま、海面に上がったように大きく息を吐いた。それでも汗は止まらないし苦しそうだつたのでクーラーをつけてみた。すると、どうしようか思案しているうちに少女の寝息は落ち着きをもつていった。

そして今。リモコンの表示は二十度だった。季節はとても暑い終夏、私は押し入れから引つ張り出してきたカーディガンを羽織っている。そして贅沢の甲斐あつてか、少女の寝息は細いが規則的なものとなつた。

少し、いいだろか。私は和紙を被せた小さな間接照明の電源を入れた。灯つた明かりに一瞬だけ少女のまぶたが動いたが、光を柔らかくしたためか、さほど辛そうでもなかつた。

五歳くらいだろか。幼い。顔全体の印象は薄く、長くない睫毛が髪と同じく淡く青みを含んだ黒で濃く目に留まる。表情に薄く灰色が差しているが、逆にそれは小さな輪郭の中で整頓された顔に独特の、宵に浮かぶ舟の様な雰囲気を作り出していた。

…似てる。彼女の面影が間違いなくこの子にあつた。少女の口が小さく呻いた。その平和な仕草に私の目元が僅かに力をぬいた。そして小さな額に手を当ててみた。手の甲にそよぐ髪の毛の感触があり、そして、懐かし過ぎる心地が手の平に触れた。

この涼しさを感じたのは、あの夜は、五年以上前のことだったということだろうか。あまり、覚えてない。やはり……私の子なのだろうか。どうやって確かめればいいのか。認知した覚えもないが、どうすればいいのか。……奉公させてと言われてもな。

寝不足の頭がぐるぐると回り、こめかみに力が入る。煙草に火をつけ、乾いた唇から煙をはいた。ん、と呻く声が聞こえた。寝苦しいのかと彼女の顔を注意深く覗き見ると、微かに言葉が聞き取れた。

おつかあ、おつとう。

そう呟いていた。

頭の回転が穏やかになった。そして胸中の一点が熱を帯び、唇が僅かに締められた。

まあ……明日、考えればいいか。煙草を消し、布団の隣に毛布を敷いた。その上に横になり、私は目を閉じた。外に置いとけと言われてもな。

「申し訳ございません……はい。いえ、大丈夫です。月曜は出ます。ご迷惑をお掛けします。はい、ありがとうございます。……では失礼します」

電話を置き、私はテーブルに座り直した。

「じゃあ、メイ……さん。まず苗字を教えてくださいませんか」

一間、静寂を置いて少女の首が左右に二回ふられた。「わかりません」

私は鼻で大きく息を吸い、お茶を一口飲んだ。「あ、じゃあ、お母さんの名前は？」

少女は手を後ろへとまわした。そしてピツという電子音と共に、冷たい風が私達を扇いだ。

少女は両手を膝に、仰々しくお辞儀をした。「ごめんなさい」

「うん」私は頬を掻いた。「別にこつそりクーラーを使わなくていいんだ」

少女は背後からエアコンのリモコンを取り出し、丁寧に両手で差し出した。

私は受け取ったリモコンを少女に返した。「遠慮しないで、使えばいい。それよりお母さんの名前、教えられないのか？」少女が一回、頷いた。

娘を預ける夫に妻が名前を教えないなんて、自他共に結婚はしてないが、とにかく都合の良いおかしな話だ。まあ、あの日も手紙でも教えてくれなかったし、何故かそこまで興味も湧かない。私の気持ちでは諦めのような納得ができていた。

だが、それ以前にこの子が私の娘と決まった訳ではない。預かる預からないは別として、これから動く上で現状を理解する必要があると思うのだ。私は、この子が昔一夜関係を持った女から送られてきたこと。そしてこの子の名前がメイであるということしか分かっていないのだ。

「じゃあ、住所は？」

「住所って何」

うん、と私は眉をしかめた。そして「お母さんと、どこに住んでるの？つてこと」と聞き直した。すると少女の顔に初めてのの明かりが灯った。私の顔にも明かりが灯った。「分かるか」

少女は元気よく答えた。「山奥」

私はテーブルに両肘を乗せ、向かいのイスの上に正座する少女に言った。「麦茶飲むか？」

「うん！」良かった。麦茶は気に入ってくれた様子だ。やっぱり子供は元気が一番だ。

朝起きたらまだ洗濯してない着物か浴衣を着ていて、昨日一回着させて脱がせた肌着で床そうじをしていて、エアコンの温度は十八度だった。私の体温は三十八度を超えているかもしれない。

はは、若いな。

幼さを少し恋しく想い、私は麦茶を入れたコップに氷を四つ入れた。

「ちよつと失礼」そう私はトイレに行った。

戻つてくると少女が床にうづくまっていた。

「おい、大丈夫か」床で呻く少女に聞いた。「冷たくて硬い」テーブルの上の麦茶には氷がなくなっていた。どうやら飲み込んでしまったようだ。

そりやそうだと私は困ってしまった。とりあえず喋れるということは呼吸ができないというわけではないだろう。私は少女の背に手をやり、大丈夫か大丈夫か、と阿呆のようにさすり続けた。

「もう、大丈夫、です」そう言つて、また肌着で床を拭き始めた。

私は少女を背後から両手で持ち上げた。きやつ、と両手両足をばたつかせる少女に「そんな氣を使うことはないんだ、座つていなさい」と言つて脇に下ろした。すぐく軽い。

解放された少女は早々と部屋の隅まで這い、正座した。初めて会った時もそうだったが、この子にとって部屋の隅は安心な場所のようだ。気持ちは分らないでもないが、明るくない部屋の中（電気は夜オレレンジ灯しか点けない、蛍光灯は少女が眩しそうにするから）こつちを向いて体育座りをされる方はあまり落ち着けない。

子供つていうのはこんなにも手間が掛かるものなのか。私は全国の母親に光明を感じる想いだつた。

「ほら、その着物も脱ぎなさい。この前買つてきて、まだ雑巾にされてない肌着が一枚残つている。これを羽織りなさい。それはきれいにしような」

男性用肌着をもって近づくと、少女は両手で自身を抱きしめ、首を振つた。

私が……変態か。と少し哀しい心持ちになった。

私は台所の換気扇に向かい、煙草に火を点けた。

これではいかん。現状維持に精一杯で状況把握もままにならない。

まあ、幸い金のかかる趣味もないため、生活費くらいはなんとかなるだろうが、とにかく、日常環境を整えなければ……。心に余裕の持てる日常があつてこそ、が私の持論だ。

よし。煙草を消し、風邪薬を栄養ドリンクで飲み込んだ。

私は少女の前にはしゃがみ「買い物に行こうか」と言った。少女の口元が引き締められた。

「君が着るもの。君が着たい服を買いにいこうか」少女はまだ少し訝しげだったが、少し開けた口と見開かれた両目が買い物に連れて行く意義を感じさせた。「麦茶飲むか」

「うん！」

「よし。入れよう」私は台所へと向かった。

明日は休日だ。とりあえず今日はこれで大丈夫。考え過ぎるのは毒だ。しゃがみ込み麦茶のパックを取り出した。重い頭をうつむかせることを止め、私は勢いをつけて立ちあがり、天井に顔を向けた。突然視界が揺れ、足の力が抜けた。

ん。白くぶれた視界が焦点を取り戻すと、少女が近くで私を心配するように眺めていた。「大丈夫ですか」

「ん」私は立ちあがり目の前、から一步離れて見上げる少女に「うん、大丈夫だ」と言った。

「ちよつと横にならせてもらうよ」そう言つて私は寝室に向かった。

毛布の上に横になり、布団も、とりあえずもう一組買ったほうがいいか、などとぐったり考えた。

「麦茶飲む？」いつの間にか傍にいた少女がそう言った。

「……うん。ありがとう」いい子じゃないか。台所へ向かうメイの足音を聞いているうちに私の意識は床に吸いこま

れていった。

さあ、デパートに行くぞ。

と、風邪の余韻により喉の痛む声で、外へのドアを開けた。まだ十時にも関わらず、外は日光が眩しく、やっぱりもう少し遅くにすれば良かったか、と思わせる暑さがあった。メイは暗い室内に差し込む柔らかな明かりを浴びると、半目の両眼を睨り、外からの爽やかな空気をたぐるように右手のタオルケットを引きずりながら、のそのそとドアまで歩んできた。そしてそのままドアを出た所で崩れ落ちた。

「うお」慌てて固い床に倒れるのを阻止し、部屋のベッドに戻した。

一時間後。

五杯目の麦茶を飲み終わると、メイは立ち上がりドアの方を向いて、顔を強張らせた。ドアを睨む視線と、低く落とした腰と、少しずつ前へと進むスリ足が、私はデパートに行く、という強硬姿勢なのだと解釈できた。そういえば、メイは眩しいのが苦手だった。部屋をほろ暗くしているのに慣れてしまつて、つい忘れていた。ならば夏の日光の眩しさなど大きな脅威だろう。あと、暑いのも苦手か。

私は押入れに向かい中を漁った。何か彼女を助けてくれる道具はないものか。明日から私は仕事に行く。決心が焦りと緊張を生んだ。

・・・ハンチングが出てきた。が、浴衣に洋風鳥射ち帽子など私には抵抗があった。今ふと、メイのその消炭色の浴衣と青みを含む黒髪を基とする一つの抽象。その調和の中心をずらしたくない思いが少なからず私にはあるのかも知れない、と感じた。サングラスも出てきたが、どちらにせよ暑さは塞げない。うん、と考え始めたところで好い物を玄關に見付けた。

「よし、デパートに行くぞ」ノブを握り、私はメイと自分に意志確認をした。

「はい」私の一メートル後ろで、メイは厚みのある領きを返した。覚悟のような決心が確かにあるようだ。

「開けるぞ」私はメイと自分にそう告げ、外へとドアを開いた。爽やかな空気と射すような日差しと押し込まれるような暑さが私を順番に襲った。「よし」

そういつて私は右手を天に上げた。そしてその手に握られたものの一部を左手で勢いよく押し上げた。

黒く小さく、傘が円状に開かれた。すると私を中心とする空間には、部屋には劣るものの、涼しさとほろ暗さが生まれた。「悪くない。来てみなさい」

メイはゆつくりと黒いビニール傘の下へと入った。私はメイを見た。メイは私と傘を見上げそして「悪くない。です」と言った。

「よし、じゃあ今度こそ、出発だ」傘をメイに持たせ、私とメイは出発した。

階段を降りるとき、私のすぐ後ろで追う様に鳴る足音が、私とメイを木陰のような現実感で覆った。

私の気持ちは少し引き締まり、私達はデパートへ向かい歩を進めた。

十五分も経たないうちに、中間地点の駅に着く頃には、メイがばててしまった。肩が上下し息はか細く荒く、前に垂らした両手の袖が地面に着いてしまっそうだ。そうなるだろう、と出発後すぐに日傘を私を持ったのだが、考えが甘かったようだ。それとも、ビニール傘に遮光効果を求めるのが元々の間違いだったのだろうか。時刻は十一時三十分とちよつと。急ぐことはない。「喫茶店にでも入ろう」

「まだ大丈夫です」きつぱり、でもかすれ声でそう言ったメイに私は失笑し近くのちよつと裏にある喫茶を定め、中に入った。

「いらっしやいませえ」

べっこう色の長い髪の若い店員がしとやかに私達のテーブルについた。軽く会釈を返した私に向かって視線を返し「ご注文はお決まりですか」と言った。「エスプレッソと・・・メイ、さんは決まったか」メイは先程と変わらず呪うようにメニューを睨み込んでいた。私は店員に聞いた。「麦茶はありますか」「えー。麦茶は、ないんです。ごめんさい」とメイの様子を申し訳なさそうに見て「ウーロン茶ならあるんですけど。これがこの店で、一番麦茶に近いと思います」「メイさん、ウーロン茶でいいか」メイは小さくはい、と大きく相槌を打った。疲れた目を細めている。「じゃあウーロン茶をお願いします」メイの様子を嬉しそうに眺めている店員に言った。「かしこまりました、それではごゆっくりなさって下さい」そう言つてウェイトレスは下がっていった。カウンターでは店主らしき男がこちらに目を向けていた。昼時なのに他に客はおじいさんとおばあさんの一組だけだった。ウェイトレスもさっきの若い女の子しかいない。だからこの店に入ったわけだが。そして私達の間会話がなかった。

「そういえば、メイ、さんの歳は幾つなんだ」

メイは指を四つまで折った。「六つ」小学一年生か。ランドセルを背負うメイ、を思い浮かべたところでさっきの高校生ぐらいい見えるウェイトレスが飲み物を運んできた。「お待たせしましたー」

「ありがとう。ほらメイさんも飲もう、まだデパートまで半分程度だ」神妙な顔つきでうなづいたメイは両手でウーロン茶を受け取りストローに口をつけた。

「娘さんなんですか」

店員が目を大きく開いた笑顔で私の返答を待っていた。

「・・・みえませんかね」

店員の顔が強張った。「あ、いえ。・・・さん付けしてたのが面白くて、お気を悪くしたのならごめんなさい」そう言つて店員は頭を下げた。

「いや、やっぱり変かな。どうも敬語が口に染みついてしまっていて…。よく堅苦しいとか言われます」頭を掻いて私は焦りを散らした。「いえっ、大変素敵だと思います」微妙な誉め言葉を述べて店員は「ウーロン茶おいしい？」とメイに聞いた。メイは眉毛の上から笑顔を「おいしい。です」と店員に答えた。すると店員は最初の笑顔で「ほんと？良かったあ」と言った。

「ちょっとトイレに行ってくる」エスプレッソが空になり、ウーロン茶が半分になり、私は席を立った。

手洗いの鏡に映る自分は、自宅以外でトイレを利用したとき見る自分の顔とさほど変わり無かった。さつきは少し動揺してしまった。親戚の子を、と答えそうになった。そして途端にメイの立場が頭に浮かび、強張った声が出てしまった。さん付けは周囲から見たら不審か。六歳児にいい大人が敬語なものな。警察を呼ばれないだけ良かったと喜ぶべきだろうか。

親戚の子を預かっているのです。

はい。私の娘です。

メイにとつてどつちが嬉しい。…。だが、「親戚の子」なんて言うのはメイの孤立感を煽るだけのように思えた。洗った手を拭き、席へと戻った。メイが長いストローの挿してあるペットボトルを両手に持っていた。ラベルには「祖母の麦茶」と書いてある。「それどうしたんだ」席につき、聞いた。メイは「あの御姉さんがくれ、ます」とペットボトルを手にしたまま、体と両手の小指でさつきの若いウエイトレスを向き指した。いや、私はいらないが…。とつい呟いたところでウエイトレスがこつちに気づき、手を振った。私は小さく会釈を返し、メイは両手のペットボトルをくるくると回転させていた。

「飲まないのか」

私がそう言うと「飲みます」とメイは眉と口の緊張を緩め、ストローに口をつけて音もなく吸った。ウーロン茶だ

けグラスごとテーブルからなくなっていた。苦いのかな。

「ありがとうございますー」会計を終え私は「麦茶どうもありがとう」とペットボトル代を断ったウエイトレスに言った。「ああ、いえーそんなあー。なんでもないです」と彼女は若々しく笑った。実はエスプレッソのカップの下に二百円を置いてある。私の方が一枚上手だ。

それはともかくと彼女を見ると、最初はパンチ強く見えたべっこう色の髪の毛が今は遠慮がちに背中を下ろしてあるように見え、なんとなく名札に書いてある「黒木えり」とあいまって彼女がうららかに見えた。

「ご馳走様でした」「ごちそうさまでした」お辞儀をするウエイトレスが閉まるドアに隠され、私達の眼前には差ししの照る街中が現れた。

「よし、じゃあ頑張るぞメイ」

「はい！」黒い傘は少し頼もしく開き、メイと私はまたデパートを目指した。

浴衣を三着。あと下着と靴下。と黒に青の斜線が一本入った日傘。布団。つっかけ（木製サンダル）を買った。結構な出費に財布を撫でながら、私は各階案内のプレートを見た。「ほら、メイさん。上に行くぞ」周囲に好奇心一杯なメイを呼び、私たちは七階へと向かった。エスカレーターから頭を乗り出し下を覗くメイを口で制しながら、おもちゃ売り場へと辿りついた。「さてと」メイが私を見上げた。売り場には沢山の子供が売り物のロボットやらゲームやら人形やらを手に取り、大いにはしゃぎ尽くしていた。クーラーがよく効いている。

普段、というか明日からは私も日中は仕事に行くつもりだ。その間、メイが暇を潰すなにかを買う必要があると思うのだ。「ほら、何か欲しいものを探して来なさい」正直、どんなものが彼女の遊び心に火をつけるのかさっぱり見当もつかない。メイの様子を観察し決めることにする。子供がひしめき、七色の音飛び交う売り場の様子に戸惑って

いるのか、少し恐る恐るな表情と足取りでメイは奥へと進んだ。その右手前方にまず、TVゲームに興ずる男の子がいた。硬くコントローラーを握り込み、真剣な面持ちの少年にメイは足を止めた。そしてその位置から怪訝そうにTVを覗き込んだ。

TVゲームか、悪くないかもしれない。私はそう思った。これなら長い時間を掛けて楽しんでくれそうだ。逆に人形とか口ポットだと二・三日振り回していれば足か腕か、はたまた首が折れて飽きてしまいうさだ。女の子の場合だと、勝手はどう違うのだろうか。

だが、私の関心も虚しく、メイは奥へと歩を進めた。どうやらピンと来なかつたようだ。おもちゃ、というよりも売り場の様子を伺うようにメイはゆっくりと周囲に顔を動かしながら歩いていた。時間がかかりそうだった。喫茶店でコーヒーと煙草で一服したい気持ちを抑えつつ、私は近くの椅子に腰掛けた。

ぼう、としていた。

「お父さん。これ買って」父親におもちゃをねだる息子がいた。両手に大小様々な買い物袋を下げた父親は「我慢なさい」と億劫そうに言った。

そして気付いたらメイの姿が見えなくなっていた。立ち上がり、売り場の奥まで行ってみたが見当たらない。デパートのどこかの隅で蹲り体育座りをするメイの様子が想像された。

しまった。七階を一通り歩いてみてもメイの姿は見えなかつた。息の荒いグルグル眼鏡の男がメイを飴玉で誘う様子が浮かび、私は足を速めた。そうだ、放送を使おう。早足でエスカレーターへと戻るとおもちゃ売り場前でしゃがむメイを発見した。入り口にいたのか。ほっ、と溜息をついてメイに近づくと、彼女の視線が強く前方のTVに向けていることに気付いた。私はメイの隣にしゃがみ込み、TVに注目した。子供向けの漫画……アニメだ。メイは間近に顔を遣っていた私に気付き、両目を見開いた。なかなか熱中していたようだ。

「これ欲しいか？」そう言うとメイは眉端をハの字にし、唇を波線にうにうにと結んだ。

私は立ち上がり「これ下さい」と店員を呼んだ。

はぁーい。と店員が駆け寄ってきて「良かったね」とメイに言った。

「うん」と笑みのにじむ顔で彼女はそう頷いた。その笑顔にうんうん、と感無量な私に向けて「二万九千八百円になります」と店員が告げた。

一通り重要だと思ふ箇所を線を引き、私は本を机に置いた。

溜息の出た口にコーヒーを運び、取り上げた煙草に火を点けて何気なくメイに目を向けた。

体育座りをしてT・に向かうメイの後姿は微動だにせず、つい肩の小さな動きに注意してしまふほどだった。

時計を見た。もう二時間経っている。私は煙草を消し、メイに近づいた。何故か足音をたてないように歩み寄り、メイの強張った横顔が見えるところで床に腰を下ろした。

ある魔法使いの話だった。

アンフィと呼ばれる女の子は日本語がしゃべれる魔法使いで、執事のセバスチャンと暮らしている。アンフィは魔法の薬を作って、沢山の困ったことを解決していくという筋書きだった。

友達の太郎くんは頑張り屋だった。自分しかいない剣道部に部員をいれようと、小学校のグラウンドの隅で剣道のパフォーマンスを披露しながら一生懸命勧誘活動をしていた。だが、生徒たちは目を向けるに過ぎず、足を止めることなく学校の外へと楽しそうに下校するばかりだった。中にはからかいの声を上げる人もいた。アンフィは腹を立てて、そんな男子生徒と喧嘩したが、それからよく考えた。

木の軋む音に目を向けるとメイが床に両手を押し付け、ギシギシと揺すっていた。

下にも住人が・・・と言いそうになった。が、メイは今までがおとなし過ぎたし、唸り声を出すほど集中しきっているところに注意を挟むのは気が咎めた。

「ちよつと失礼」私はタオルケットを持ってきて、少し訝しげに目を向けるメイの下にしいた。

目を戻すとアンフィは長い杖を取り出していた。先が細い壺のようになっていて、アンフィはそこに七色に光る粉を入れて息を吹き込んだ。メイの両目が輝いた。

アンフィは杖の先から取り出した粉をジュースに混ぜ、水分補給と称して太郎君に飲ませた。

すると傍目に太郎君の体が光を帯びた。下校する生徒たちの目が向けられ、足を止めて太郎くんのパフォーマンスに注目が集まった。

ハッピーエンドだったところ。血もない。悪役もない。肝心なところは神がかりな力に頼らないところに、好感を持った。

メイが満足気に麦茶をゴクンと飲み干した。「楽しかったか」

「うんー」

そうじゃなきゃ困る。笑顔でそう思った。シリーズ物だからセットで買ったとはいえ、三万近くもするとは・・・まあ、これで当分の間は、日中は仕事をこなし、夜に今後の対応をじっくりと考えることができるだろう。明日はいよいよ仕事だ。まだ風邪による肉体と、あと心の疲れが少し残っているが、そんな愚痴は許されない。目線を落とすと、床に置かれたアニメビデオが目に入った。「Secret・Anfirmer（シークレット・アンフィルミール）」直訳すると、秘密の看護婦。なんともいがかわしい看護婦だ。題名が気になって辞書まで使ってしまった。子供にとつて知らない言葉の意味なんて存在しないのだろうか。散らばったビデオテープとケースを戻したところで、視線に引っ掛かったビデオがあった。

看護婦、犯す。

固まった私を心配そうにメイが見つめた。「なんでもないよ」

アダルトビデオ延滞の恥、そしてメイが目撃・鑑賞していた場合の影響、その二つが灰黒い濁流となり私を深い気疲れへと飲み込んでいった。

最寄り駅を出ると、夜の商店街が目の前に見えた。仕事の帰り道、久しい風景を歩いた。これを繰り返すのが、今の私の日常。日の下で精一杯働き、日が沈めば、のんびりする。

世間を寝かせ、好きな事に思いを馳せて、自分を重ねていく。そんな毎日が好きだ。昨日までの一日中ドタバタな生活も今考えれば新鮮だったが、やはり私自身を進めていく時間は大切にしたい。メイを預かるのは短い間だと手紙には書いてあった。とりあえず今日帰ってメイの様子を見て、また生活の調子を整えよう。どうせ短い間だ。今はそれでよしとしよう。暗の訪れている商店街を抜け、家への一本道を歩く。先の右手に明るく灯るコンビニエンスストアが見えた。何か買っていくと喜ぶだろうか。麦茶に合いそうな饅頭でも買おうか。そんな自分の様子に、失笑した。照れ隠しに空を見上げると、大きく雲のかかった三日月が遠くに見えた。

メイは今日を無事に過ごしただろうか。出るとき置いておいた朝食のパンは食べてくれただろうか。昼食に冷蔵庫のそばと桃を食べてくれただろうか。歯磨きはしただろうか。寂しがってないだろうか。つい外出したりしてないだろうか。さらっと変なお兄さんに手を引かれたりしてないだろうか。それでうっかり軟禁されたりしてないだろうか。

真つ直ぐ帰ろう。そんな訳はないのに、私は早歩きで家を目指した。階段を忙しくのぼり、静かに自分の部屋に辿り着き鍵を開けた。

…部屋は真つ暗で、何も見えなかった。私は体半分を玄関にいれ、部屋にメイの姿を探した。「メイ…さん」返ってくるのは静寂だけだった。目が慣れてくると私はドアを閉め、オレンジ灯を点ける紐を探した。紐を掴むより早く、ズボンの裾が引かれた。足を蹴り上げるそうになるのを制し、後ろを振り返った。メイだった。私は前にしゃがみ込み、見えない表情に語りかけた。「…心配したよ。大丈夫だったか」メイは顔を上げようとし、また伏せた。寝かせておいてあげよう。

そんな安直な朝の私の想いにより、メイの一日は不安に支配されたものになってしまっていたのだろうか。息が触れる程近くも、触れずに固まるメイの頭が私をそう後悔させた。

私は俯いたメイの頭に手を置いた。メイの肩が一瞬震え止まって、私達はしばらくそのままだった。

そして、「オレンジ灯を点けよう。それで麦茶でもいれるよ」と私は立ち上がった。するとメイは部屋の隅に走り、布団にもぐりこんだ。

それを見た私は掴んだスイッチ紐から手を放すと、風呂に入り、歯を磨き、麦茶を飲んでから隣に布団を敷き、寝に入った。「ごめん」暗闇にそう言って目を閉じた。

沈むような眠りを頭にした頃、右腕がひんやりと圧された。力を入れそうになり、留まった。その感触は小さな手が私の腕を掴んでいるものだと気づいた。

ごめんなさい。

小さな囁きが聞こえたように思う。

私は目を開け、瞼と同じ暗闇を見つめた。何故謝る。

朝、起きると私はいなかった。メイ。メイにとって、誰もいない寝起きは心細いものだったのだろうか。部屋の隅でうずくまり家族かも分からない私の姿を求めてくれたのだろうか。揺さぶって起こしてでも一言声を掛けてい

くべきだったのだろうか。起きている時は見せなかった、歳相応の無垢な安らぎで眠るメイを。右腕を掴むひんやりとした小さな感触が、私を後悔の懸念から脱させた。

私は目を閉じた。

そして決して右手の感触が離されぬよう、身動きしない、とやがて訪れるだろう睡魔に誓った。

朝八時。コーヒーが沸いたところで私はメイの枕元に向かった。「メイ、起きてくれ」

メイをタオルケットの上から静かに揺さぶると、暗の籠ったまぶたが開き、青墨色に瞳が私を向いた。

「おはよう」

「おはよう、ございます」くぐもった声でそう返しながら、メイは布団からのそのそ起き上がった。

メイが私の前に立ったところで「おはよう」私は再度そう言った。

怪訝そうに、「……おはよう」でもメイはそう繰り返し返した。「よし、ご飯にしよう」

私はメイに背中を向け、テーブルに調理済みの朝ご飯を並べた。

「君に頼みがあるんだ」パンを口一杯に頬張ったメイに私はそう切り出した。動きを止めたメイに「すまない、それ飲み込んでからでいいよ」と私は言った。

麦茶を使い結構な頑張りようでパンを飲みこんだメイは椅子に深く座りなおし、床に届かず揺らしていた足を前に揃えた。もう椅子に正座はしない。一問待ち、私は口を開いた。

「メイ。私は私達が暮らしていくにはご飯や服や家や、もちろん麦茶も必要だと思う」メイの目は呆けていたが、私は構わず続けた。

「それらを手に入れたり維持したりするにはお金が必要だ。麦茶を飲ませてあげたいし、私は毎朝毎夜コーヒー

を飲みたい」けだるい様子を引きずりながらも、メイはうん、うん、と肯いた。

「お金を得るために私は七日の内五日間の日中、昨日と同じように仕事に出ようと思うんだ」

メイの顔に不安な曇りが伺えた。昨日の夜の感触がよぎり、胸奥が冷えた。

「昨日は黙って出ていって悪かった」私は頭を下げた。「だから今日は言ってから出ようと思う」

「だから、メイには9時から5時まで一人で家でお留守番して欲しいんだ」結局、今日もそれを繰り返しそうなの自分に頭の奥が熱を持った。

頭の上で、あ、という声が聞こえ私は頭をあげた。メイは両手をテーブルにのせ、小さな体を乗り出してた。「わたしは…おつかあに、あなたの生活やお仕事を邪魔しないように、と約束しました。だから、いいの。昨日は……ごめんなさい」メイはただ私に向いていた。たぶん頭にクーラーの風がそよいでいて、胸に本能を殺すような氷が当てられた、そんな優しくも無情で、少し危うい涼しさだった。「ありがとう」昨日までの私達の情景が遠く離されたなかで私は、また謝らせてしまったか、と何故か微笑みまじりに考えた。

「じゃあ行ってくるよ、メイ」ドアを半分開け、見送りに立ってくれているメイに言った。

「行つてらっしゃい、ませ」少し微笑ながらも目元に陰が差している。朝早く起きて疲れているのだろうか。

「うん、あ、あともう一つお願いが…」メイは目を少し広げて私を見た。私は頭を掻いて「できれば…敬語は使わないで欲しい。私は、メイにはもつと迷惑を掛けてもらった方が嬉しいよ」と言った。

は…うん、とゆつくりぎこちなく、メイは一回うなづいた。私もうなづいた。「じゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃい」お辞儀をしたメイに背中を向け、あ、私が敬語使ってしまった、と思ひながら私は家を出た。照る日差しをなんとなく懐かしみながら私は仕事に向かった。

そして日が沈んだ。仕事を終え、私はコンビニエンスストアで麦茶に合いそうな饅頭を買い、家路についた。そしてドアの鍵を開け、なんとなくゆっくりと扉を開けて、いつものように暗い自分の家上がった。

いや、オレンジ灯はつけていてもいいんじゃないか。真っ暗な部屋に上がり、紐を探り当てオレンジ灯をつけた。私は部屋を見渡してから寝室に入った。

ベッドのタオルケットを広げて、空いているトイレのドアを開け、湯の張っていない浴槽を覗いて、収納の襖を開けてみた。

そして最後に私は玄関のドアを開け、外を見回した。が、メイの姿は見つけられなかった。

：散歩か。

私はコーヒーを沸かし、椅子に座って新聞を広げた。

一通りの記事に目を通し、政治家に溜息をつき、明日の天気曇りと知り三十分経ってもメイは戻って来なかった。コーヒーは空になり、着の身は帰宅した時のままだった。

私は外に飛び出した。

家のドアから身を乗り出し、マンションの廊下を目にしたところで気付いた。

行くあてが分からない。

私はしばらく地面のタイルを見つめてから、ドアを閉めた。電話を手に取り、ダイヤルを回した。

「はい、こちら近工交番」

「近隣の者ですが、そちらに六歳ぐらいで迷子の女の子はいませんか」

「迷子ねえ…。いつからない子？」

「一時間程前からです」

「うーん。…いないねえ。お宅の娘さん？」

「…、は？」

「フルネームを覚えてもらえる？あなたのものね。住所も」

失礼します、そういつて私は電話を切った。

薄暗いリビングの換気扇に向かい、そうか今はここで吸う必要もないか、と気付き、テーブルの椅子に腰かけて私は煙草に火をつけた。

二口煙を吐いたが、名案はなかった。私は肘をテーブルにつき、頭を両手で覆った。念の為と、鍵を持たせる必要もなかったか…。違う、やはり寂しい想いをさせてしまったのだ。

今はそんなこと考えても仕様がなない。顔をあげ、もう一口煙草を呑んだ。メイが何処に向かうか、考えてみよう。この短い間、見たメイについてのすべてから。

暑いのが苦手。少し寒いぐらいが好き。差しこむような眩しさが苦手。麦茶が好き。ウーロン茶も苦手。おそらく苦いのが苦手。アニメのシークレット・アンフィルミエーフが好き。主人公のアンフィが、雲が舞うような背景の中で、ステッキに息を吹き込んで薬を作るシーンがお気に入り。山奥から来た。浴衣・着物を気に入っている。新しく買った子供用の青の斜線が一本入った黒い日傘を部屋でいじっていた。多分、気に入ってくれていた。遠野のあの人が送ってきた。小さくて軽い。遠慮がちだった。子供らしく意思を我がままに示さない。明らかに付け焼き刃だが、敬語をよく使う。今朝お互い敬語を止めようと約束した。そして、私の娘かもしれない。

私は二本目の煙草に火をつけた。

玄関に日傘が置いてある。今日も残暑のきつい日差しだった。外へ出たとしたら、私の帰宅時間の間。今から最大一時間前。日の沈みかけた五時。陽の下でメイは日傘がないと立っついていられない。メイの足取りは見た目の通り遅い。

電車にも乗れない。お金も持っていないはず。唯一メイがウチに持ってきた兎の着物とセツタはここにある。そんなに離れているとは思えない。人気のない場所。衝動的な外出だろう。一番考えられるのは、散歩に行つて、迷子になつた。以前唯一我々が外出したとき、デパートに行くための進路は人混みだらけだつた。もし、人混みで路頭に迷つていたら、六歳のメイは警察に保護されてもおかしくない。それにメイはあまり人気が好きだとは思えない。だから多分メイが散歩するとしたら逆、公園のある方ではないか。そして涼しいところ。

遠い先でメイが途方に暮れているような気がした。

行こう。煙草をもみ消し、私は立ちあがつた。買った饅頭を冷蔵庫に入れ、麦茶の残量を確認して家を出た。外は小雨だつた。「いつの間にな」玄関に戻り、私は頭にハンチングを被つた。そして右手にメイの黒い日傘を持つて再度家を出た。

メイが帰ってきたときのために、とりあえず一時間で戻る。時刻を確認し足を速めた。

だいぶ迂回しながら、小森公園についた。雨はすぐに止んだが、遅い夜が始まるうとしていた。空の陽は消え、静寂と薄暗さが薄い膜のように風景一帯を覆つていた。

私は十五分かけて公園内をくまなく走り回つた。道端のベンチ。アスレチックの小山の中。歩道逸れた雑木林。メイの気配も感じられなかつた。

この公園は、そこそこの小学校が建てられるぐらいの広さがある。その上、木がとても多い。公園全体が木に囲まれており、所々に林がある。かくれんぼをすれば鬼は真つ青だ。この公園が小森公園と呼ばれる所以である。おまけに陽のないこの視界。

考えが甘かつた、と休みなしだつた私の足は走るのを止めた。途端に肩が重くなり、息も絶え絶えに私は近くの植

え込みに腰かけた。

時計は六時半。探しに家を出てから三十分が経った。

家に戻っているだろうか。そんな期待が頭を過った。

そして無力感が胸を拭いた。見当違いだったのか。

私はアイスコーヒーを買い、煙草を一本吸った。缶はすぐ空になり、煙草は喉に合わず捨てた。

こつちの方だと思っただけだな。

方向が分からなくなつてわたしは足を止めた。体にネバつくような雨が降った突端、すべてが分からなくなった。それでもふいに感じたおつかあの気配を捜そうとぐるぐる回っている内に帰り道が分からなくなつて、気付いたら沢山人がいる賑やかなここに出た。雨は止んでくれたけど、何処に行けばいいのかは分からない。すごい時間が経ってしまったかも。わたしは道端に腰かけた。

気のせいだったのかな。一帯の黒に一点広がった透き通るようなおつかあの白。それは上から注ぐ黒い雨によつて滲み、黒い地面に滲んで消えてしまった。

……おつとう、が心配してるかな。また困らせてしまう。空を見上げた。星は見えなかった。

家に置いてもらうぐらいだから役に立たないと、思っていたのに……ずっと迷惑をかけてる。

おつかあがいるわけがない。わたしはわたしに強く言った。

おつかあはわたしが戻されるとき以外は来ない、と言った。

早く、帰らなきゃ。着地するようにわたしは立ち上がった。

「なにしてるの？」お尻をはいたら横から声をかけられた。

前、麦茶のペットボトルをくれたお姉さんだった。

「こんにちは、えーと……」お姉さんが辿るように空を指で軽くかき回した。

「メイといいます」そう言つてわたしはお辞儀をした。この挨拶はもうできる。

「あ、そうそう。メイちゃんね。こんにちは。黒木えりと云います」そう言つてお姉さんもお辞儀した。

「こんにちは」わたしが何だかおかしくそう言つたとホウキを持ったお姉さんは隣に座つた。

「何してるの」そう言つてお姉さんは私に首をかしげた。

「お家に帰るの、です」おつとうに心配されないために早く帰らなくちゃ。

「ふーん。一人？」お姉さんは怪訝そうに聞いた。

「はい。一人です」そう言つと、お姉さんは口を押さえて少し笑つた。

なんでだろう。すると「あ、ごめんごめん。メイちゃんて敬語使えるんだね」とお姉さんは何故か謝つた。

「へー。でも一人で何してたの。お父さんは？」

「お仕事」

「あ、そつか」たはは、とお姉さんはホウキを上下に動かした。

「君もね」怖い声が後ろから聞こえた。

わたしもお姉さんもそつちを振り返つた。「あ、店長……」こないだのおじさんが腕を組んでお姉さんを見ていた。「あははは……失礼しました」そう言つてお姉さんはまたお辞儀をした。

「あれ、その子……」テンチョウさんが私をカカシみたいな顔で見た。この人もわたしの名前を知らない。「メイといひます」そう言つて私はお辞儀をした。

テンチョウさんはびつくりしたみたいに「ああ、店長です。これは丁寧にも……」と上手にお辞儀した。

はははは、とお姉さんはまた笑い、テンチョウと目を合わせるとまた「失礼しました」と言った。

なんだか、簡単だ。わたしは少し楽しくなった。「テンチョウさんとお姉さんはその服がお気に入りですか？」

テンチョウとお姉さんは顔を合わせ「いや、僕等はお仕事だからね。これはお仕事用の服なんだよ」とテンチョウが言った。横でお姉さんが立つてうなづき「ワタシの本業は高校生だけどね」と言った。

わたしは頭を傾げた。

「じゃあなんでお出かけしないんですか」そう言うと二人はまたカカシみたいな顔になった。

そしてテンチョウさんが後ろを指差した。「ここが私達の仕事場だ」

あ。テンチョウさんとお姉さんの後ろの建物は見たことがあった。

こないだおつとうと麦茶とコーヒー飲んだところだ。

だからわたしはここに座ったんだ。

「わたしも、ここでしごとしたいな」そうすればお金が入る。そうすればおつとうもあんなに出かけなくてすむ。ううん、おつとうもここで働けば楽しい。おつとうはコーヒーを飲みながら、わたしは麦茶を飲みながら、一緒に仕事を

をする。

「それいいね」笑顔でお姉さんが言った。テンチョウさんがお姉さんを見るとお姉さんは笑うのを止めた。

「ええと、メイちゃん、だっけ」テンチョウさんはわたしの前にしゃがみこんだ。そして頭に手を置いた。

「お母さんは何処にいるの」

「え」何でそれを聞くのかよく分からなかった。「遠いところ、です」でも近くにきたような気がした。だから捜しに家を出た。でも雨が沢山振った途端、その場所が分からなくなった。

「おとうさんは迎えに来てくれるの」

「わかりません」テンチョウさんの手はざらりとした。

「お家の場所はわかるの」

「もう少しすれば、分かると思います」なんだか、楽しいお話ではなくなっていました。それが何故だかは分からない。

「・・・お家の電話番号は」

「分かりません」頭が、なにか渴いた。

「お父さんはこの前一緒に来た人？」後ろでテンチョウ？、と言うお姉さんの低い声が聞こえた。

体の中の、水面が荒れている。体の水が小さなさじで掬っては捨て、掬っては捨てられているような、自分が減っている感じがする。わたしの体から力が抜けていった。この空気はわたしに元気をくれない。

「帰らなくちゃ」わたしはテンチョウさんの手から離れ、足を踏みだした。その足はわたしの体を支えることなく、わたしはかたい地面に倒れてしまった。

「はい麦茶」ワタシは麦茶の入ったグラスをテーブルに置いた。

「ありがとうございます」晴れない顔でもメイちゃんは丁寧にお辞儀をし、グラスにうつむいた。

結局、ワタシも店長も店を空ける訳にはいかないし、メイちゃんをどうしていいかも分からずとりあえずカウンター席に座らせた。

「どうしましょうか」カウンターでコーヒークップを磨く店長に聞いた。

「とりあえず、迷子で両親も困っているだろう。家の電話番号も知らないようだし。警察に電話してみてくれ。両親も気付いているなら交番に連絡しているはずだ」

警察・・・。そっか、それならすぐメイちゃんもお家にすぐ帰れるだろう。「さすが店長。年の功つてやつですね」

こういう発想がすぐ出るあたりが大人だ。

店長は「まだまだ若いさ」と言つてまんざらでもない顔になった。「そりゃあ、二十年も喫茶店やっていれば色々なことが分かるんだよ……」話が長くなりそうだったので「じゃあ早速電話してきますね」とだけ言つてワタシは店の黒電話に手をつけた。これも大人だ。

両手でグラスを持ちメイちゃんが顔をテーブルと向かい合うようにうつむかせストローを神妙に吸い始めた。「はい近工交番」

「あ、こんにちほ。えーと近工五丁目の喫茶タナカの店員の者ですが……」

「どうしました」慣れた口調でオマワリさんは用件を急かした。

「はい、じつはここに五歳くらいの女の子が一人いて迷子のようなんですが」

「お客さんですか」

「……いいえ。以前父親と一緒に来た子なんです、お店の前で一人で座っていました」

「今のところ、届けはありませんねえ……ああ。じゃあそちの住所を教えてください」

「はい。近工町五丁目……」じゃあすぐ行きます、そう言つてオマワリさんは電話を切った。

「あ、電話し終わった？」店長が横に來た。「はい。すぐ来てくれるそうです」

「メイちゃん」カウンターを挟んで呼びかけると、メイちゃんは億劫そうに顔を上げた。「もうすぐお家に帰れるからね」

「本当……？」メイちゃんの声は今にも沈没しそうな疲労感を感じさせた。「本当。今おまわりさんが来てくれるからね」

その言葉を転がすようにメイちゃんはしばらく表情を動かさずにいた。そして「ありがとうございます」と言つて

またストローに、さつきよりは勢いをもって口をつけた。

お母さんはいないのだろうか。色々の質問の途中でメイちゃんはパタリと倒れた。なんだか答えるのも辛そうで少し可哀想だった。複雑な家庭環境なんだろうか。以前父親と二人で居た時も、なんとというか、付き合いたてのカップル同士のような初々しさのある不思議な印象を得たものだ。あの若めの父親は淡々とした口調で寝起きの様な目をしてた。ウチのとはちよつと、違う。頑固で不器用で憎めないワタシの父親は今も仙台からデコトラで野菜をどっかに運んでるだろう。繊細なんて言葉は知ってるだろうが馴染みもないし、漢字で書くことは一字もできないだろう。ドラマチックには展開しない家族である。

メイちゃんはどんな環境にいるのだろうか。色々と想像を膨らませてみたが、結局ワタシに何ができるかは分からない。こういう時大人だったらどうするんだろう。

店長に視線をやると、店長もメイを見ていた。というより、眺めていた。そして視線を磨くグラスに戻し、やはり上の空な感じで細かくグラスを磨いた。別に珍しいことじゃないのかな。

早くお父さんに会えるといいね。口にはださずにワタシはそう言った。

メイちゃんがワタシを向いた。そしてほうけていた目に生気が燈り、ストンと席から降りた。ワタシはメイちゃんの向いたドアの方を向いた。「あ」

自動ドアが開き、勢いよくメイの父親が足を止めた。少し肩で息をすると、両膝に当てていた両手ごと前に傾けていた体を元に戻した。

突然の大きな音に驚いていたワタシと店長を見て彼は「失礼しました」と言った。

お姉さんとテンチヨウさんがカカシになった。

「・・・メイ、無事だったか」おっとうはわたしの前に立ちそう言った。

「うん」おっとうの体から熱いもやが出ている。そして黒い帽子は濡れていた。「ごめんなさい」

おっとうは「いいんだ」と言つて、テンチョウさんとお姉さんの方に向いた。「色々とお世話になったようでありがとうございました」そう頭を下げ、わたしの隣の席に腰掛けた。「エスプレッソを一つ頂けますか」そして帽子を膝の上に置いた。

「まあ、とりあえず一服しよう」おっとうの心には熱がなく、さざ波さえ立っていないかった。なんでこんなに静かなんだろう。唯一揺れたのは今朝、わたしにお留守番を頼んだときぐらい。そしてわたしはその約束を破った。「ごめんなさい」

おっとうは頭を掻きながらわたしを見た。ちよつと困つたような顔をして、わたしの頭に手を置いた。「無事ならいいんだ」おっとうの手は少し温まっていたけど、ぐつぐつしていたわたしのあたまを穏やかにしてくれた。

「よかつたね」お姉さんが微笑んで言った。

「うん」わたしは力をいれて頷いた。「どうも色々ご迷惑をお掛けしました」おっとうは頭を下げた。お姉さんは手を何回も振つた。「いえいえ。ガラガラの席を一つ使っただけなので痛くも痒くもありません。ね、メイちゃん。お客さん全然来なかつたよね」

「うん。ガラガラだった」本当にお客さんは誰も来なかつた。お姉さんは笑っていないテンチョウさんに「ごめんなさい」と頭を下げた。

「でも、オマワリさん呼ぶ必要なかつたね」

おっとうの心に一輪、波紋が広がった。

そしてドアが一人で開く音がした。「お邪魔しまーす」青い服と帽子のお兄さんが入ってきた。テンチョウさん

がお兄さんのトコロに行った。「あはは噂をすれば、だね」お姉さんは立ち上がり舌を出してわたしに苦笑んだ。テンチヨウさんと青いお兄さんはしばらくお話をしてから、お兄さんが先頭になってこつちに来た。そしておつと
うの前に立ち、「この子はあなたの娘さんですか」と聞いた。

「……はい、そうですが」おつととは普通にそう言ってくれた。でもちよつと声が違う。
「この人は君のお父さん？」今度はわたしに聞いた。

「はい、そうです」わたしもそう答えた。

「ごめんなさい、せつかく来てくれたのに」お姉さんが横からそう言った。

「お嬢ちゃんは幾つなの」お兄さんがまたわたしに聞いた。「六つです」

「じゃあ小学生？」

わたしは首をかしげた。

「じゃあ幼稚園生かな」

「ヨウチエンセイって何？」

「今日のお昼は何をしたの？」

「お留守番しました」

「昨日は？」

「昨日もお留守番」

青いお兄さんがおつとつとに向いた。

「お手数ですが、ちよつと交番でお話聞いてもいいですか」

おつとつと口をつけていたエスプレッソを机に置いた。「はい」

「店長？」熱を持った声でお姉さんが聞いた。「何を話したんですか」一瞬困った顔をしてから、テンチョウさんも熱を発した。「この二人は家族じゃないよ。親が子をさん付けで呼ぶか？」

とつぜん熱が周囲に浮かび、わたしの体は苦しくなった。

「そんな・・・、そんな人の好き勝手じゃないですか？てゆうか、こんなところで言うセリフじゃないですよ！」

飛び交う熱の雫の端々がわたしを撫でた。暑いよ。頭がぼーとしながらわたしはさすがにどうにもおっとうに視線を向けることしかできなかった。おっとうも突然の出来事に少し困った顔をしている。青いお兄さんも同じだ。おっとうに頼ってばかりじゃ駄目。わたしは必死に麦茶を吸った。だけど、あまり効果はなかった。氷はほとんど溶けていたし、なにより突然の温度差はわたしを異様に疲れさせた。クーラーのスイッチ・・・わたしは落ちるように椅子から降りてクーラーのりもこんを探そうとした。「きゃっ」体が持ち上げられ、わたしは椅子に戻された。そして大きな手にかぶされた両手の中に目の覚める冷たい感触があった。大きい氷の入った水のグラスだ。「これは冷えてる」おっとうはそう言っておっとうに笑いかけると気持ちの良い大きな手をわたしの手から離し、椅子から下りて立ちあがった。お姉さんがおっとうに目を向けテンチョウさんがおっとうを横目で見た。「お会計お願いします」お釣りを受け取るとテンチョウさんに「迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」とお姉さんに「ありがとう」と頭を下げた。「いえ・・・」お姉さんはそう呟きテンチョウさんは黙っていた。二人の熱はそれぞれの形でテンチョウさんとお姉さんの中に留まり、その端がわたしに触れることはなくなった。

「お待たせしました」そう言っておっとうは青いお兄さんについた。「メイ、行こう」

わたしはおっとうが何て頼もしいんだ、と思った。おっとうはわたしと同じ熱を生まない心でしかも、熱を防ぐこともできる。こんな簡単に・・・でもおっつかあとは違う。心地いい黒い部屋の中の奥のおっとうの底に何回かみた、薪でくべられたようにゆらゆらと水面に映ったピンク色。追いかける背中その端にそれを浮かべ、わたしはおっとうの

後に走った。

調べれば、書類上では、メイが私の娘でないことがすぐ知られる。私は認知していないが、心当りのある女性から送られてきた娘だ、と警察官に伝えた。勿論、そういうことなら……などとは言ってはもらえなかった。

メイは、書類上では、誰の娘でもない。迷子届けも捜索願いも出ていない。メイの嫌がる様子も見受けられなかったためだろう。私とメイは帰された。

街灯もまばらになり、私とメイは先程とはうって変わって静かな暗闇の中で家路を辿った。何時間か前、記憶のメイに聞いた言葉達は実際のメイを横にして、口から出す必要性に迷う。メイも少なからずとも同じなのかもしれない。なら、しゃべらなければいい。

なぜメイは外に出たのか。その理由は私を少し不安にさせた。それは私からすれば何年ぶりの頼みごとだった。それが破られることは、メイにとって外に出ることが私との約束を破る以上のことだったということ。止めよう。切りがない。

「はい。そうです」

私を父と肯定してくれた言葉。それだけを余韻として許し、私は雪の灯りのようだったメイの母親を想った。薄暗い風景は見慣れた雑踏へと変わっていった。「メイ、眠いか」

「うん」

その中でやわらかく灯る家々の明かりが私を少し切なくさせた。「じゃあちよつと散歩に付き合ってくれないか」

「うん」

私は小山公園に向かった。何のためかはなんとなくだが、多分寝たら仕事だからだ。

家の前を通る道順を辿った。メイが少しでも道を覚えてくれればと思う。

公園に近づくほど、メイの足取りは心なしに軽く、確実に早足になっていった。

「わ……」立ち並ぶ木々に穴を開けたように、ひっそりと設置された入り口に着くと、メイは声を出した。何時間か前に来たときとは、また何か違う。公園の自然が暗闇を深くしている。

私達は緑道を歩いた。私は雑木林やベンチに今日メイを探していた記憶を眺めたりしながら、メイはあちこちに忙しく頭を向けながら、公園の内側を円状に囲む砂利道を歩いた。

一周しかけたところで、私は中心へと向かう石道に足向きを変えた。メイも後ろに続いた。するとメイが走り出した。「あ。メイ、気をつけろ」

私の注意に丁度良く、メイは林を抜けたところで転んだ。私は駆け寄った。「大丈夫か」

私の言葉に答えずメイは前方に顔を向けていた。私はメイの体を持ち上げた。「しようこ。小さな湖と書くんだ」「しようこ……」眼前に小さく広がったこの小湖は公園の中心に位置する。高い木々に囲まれ夜には秘密を思わせるひっそりと開かれた場所だ。林から十歩程度を余地とし、小湖は黙し凜と構えていた。四百メートルグラウンド小程の水平な楕円湖の上空には、家もビルも電線もなく林に縁取られた空を仰ぐことができる。昼には差し込む日光で川底が見える程澄んだ湖だ。小さくはない公園であるが平日の遅い夜にはほとんど人はこない。「ここは私のお気に入りの場所なんだ」外の自然の空気と繋がっていたい夜、特に冬には携帯灰皿と缶コーヒーを持って私はここで三十分ほど静かにしていたものだ。

私に降ろされたメイは湖の淵にまで歩み寄り、しゃがみ込んで水面の中央を眺めた。「なんてすてき……」

「ああ」私はそう答え、木を背に煙草に火を点けた。勿論携帯灰皿は持っている。心地よい宵に吹き揺れる煙、それを見ながら私は一日の区切りを思った。

「星が見えないここに、こんな綺麗に水があるの」メイは濃い陰になった後ろ姿を動かさず、そう呟いた。

「……そうだな。私もこの景色には落ち着くよ」

「静かになれる？」

「うん。静かになれる」

メイの手が縦に振られるのがシルエツトで見え、ぼちゃん、と湖面にしとやかな波紋が広がった。

「なんで熱を出して周りの人にぶつける人がいるの」再び広がった静黙にメイの声が呟かれた。

「……熱？それは誰のことだ」

「……お姉さんやテンチョウウさん。最初から、みんな、小さな熱の粉はそこらに飛んだり、浮いていたり、降ってきたりしたけど……あの青いお兄さんが来てから今までの小さな熱のカケラを集めて大きくして、投げあつてた」

「……。それは声を大きくしたり、眉毛が内側に傾いたり、目に力が入ったりしている時かな」

メイの頭が横に傾いた。

そしてこっちに暗がりでのっぺらぼうな顔を向けて言った。「そんな感じ」

私は煙草を一口呑んだ。「ひよっとしたら、お姉さんも店長さんもメイのために、または私達のためにそうしたのかもしれない」まだ傾いたままのメイの頭に私は続けた。

「いや、結局自分を好きになつてもらうため」

「……。好きになつてもらうためには、熱を出さなきゃいけないの？」

「自分のいいところ悪いところ、それを分かつてもらうために、たまに熱を投げなければいけない時がある、そう考える人は沢山いると思うよ」

「……おつとつ、もいつか投げるの？」

「かもしれない。でも私はぶつけるのもぶつけられるのも苦手なんだ」体が僅かに振るえたのを抑え、私はそう答えた。

「わたしも」メイは振り返り、私の方に歩いてきた。表情は見えないが、その声は今のやり取りの中で一番確かなものだった。

「じゃあ、行こうか」目の前で立ち止まっているメイにそう言い、私は煙草を携帯灰皿に差し込んだ。

「うん」私たちは小湖を後にした。

小森公園を抜け出、私たちは眠ったような住宅街の坂道の端をゆっくりと下った。長い様に感じた一日も名残惜しい夜は気づけば後は寝に着くだけである。

「好きになってもらったとき、その人はどうなるの」メイが私の背後からそう聞いた。

大分メイとの距離が離れていると分かり私は歩を緩めた。

「ぬくもりをもらおう」

「ぬくもり、つて？」

「例えば、手をつなぐ。その人と自分、二人で二人だけの暖かさをつくり、二人で温まるんだ。その心地良さがぬくもり、だと思おうよ」

「……。おつどうも、ぬくもりが欲しい？」

「そうだね。欲しいよ」

左の手の平に何かが触れて離れた。振り向くとメイが右手を素早く戻した。メイは立ち止まり右手を左手で胸に抑えた。

私は立ち止まり、少し躊躇って左手を広げメイに向けて伸ばした。「ありがとう」

街頭の下でメイが微笑んだ。

私とメイは坂道を下った。家まではあと十分もかからないだろう。メイの歩幅は狭い。私も歩幅を合わせた。

私は眼を細め、歩く道を見つめた。おっとうと呼んでくれてありがとう。

繋いだ手が二人の陰を一緒にしていた。

「二」

メイを小学校に行かせるべきだろうか。メイを半日以上家に閉じ込めておくのはかわいそうだと思うのだ。だが、外を散歩させていけば、小学校が義務教育である限りいつかは顔見知りになった人達から怪しまれてしまうだろう。小学校に入れるにはまず書類上でメイを私の娘にしなければならぬ。そしてメイは小学校で無事に心平安にやっていけるだろうか。「短い間です」メイの母の言葉の扱いに困った。

そして、一つの季節を越えた。秋風に白さの混じる頃。

「ただいま」私はそう言いながら靴を脱いだ。

「おかえりなさい」玄関で私を迎えたメイは、少し興奮気味に「コーヒー飲む？」と言った。

「ああ、お願い」そう言つて私は上着を脱いで、テーブルについた。

するとすぐにテーブルにはおいしそうな湯気を昇らすコーヒーが置かれた。インスタントではない。

「早いな」恐らくこの時間に沸くようにコーヒーを用意してくれたのだろう。

メイの前には細長い暗雲が描かれた白い湯呑み。中は、水の入っていない麦茶。

「ありがとうございます。いただきます」そういつて私はコーヒーに口をつけた。

「あー生き返る」私はだらしなく溜息を着き、そう言った。

「おいしい？」まだ麦茶に口をつけず、メイがそう聞いた。

「ああ。一回くたばって生き返ってしまっただぐらいおいしいよ」

メイは笑った。そして麦茶を一口飲んだ。「あーいきかえる」

「今日は何をしていたんだ」

「お絵描きしてた」

「へえ。じゃあ、見せてよ」

「う、うん」

「照れるな照れるな」口がくすぐったいのを抑え、私は部屋を見渡した。だが、部屋の隅にクレヨンと色鉛筆が行儀良く置いてあるだけで、画用紙などは見あたらなかった。「ん、どこにあるんだ」

「こっち」メイは立ち上がり、寝室を指差した。私はなんとなくメイの顔に真剣味を感じ、軽い心持ちで見ているのか、と少し神妙気味に「よし」メイの後について寝室に向かった。

メイは私の眼を確認するように見て、何かを告白するときのようにじつくりとドアを開けた。「入って」メイは中に入らず、私の入室を促した。

「なんだこれ」私の・・・今はメイの布団の上に画用紙が一枚、置いてあった。黒い人影が四肢をだらしなく伸ばした絵。そのシルエットの人？は全身が脱力しているとれる。TVの殺人現場などで見る人形のマーキングのようだ。判断に困り、私はもう一歩中に入った。

すると壁に並べて貼られた三枚の画用紙に気付いた。証明写真のような、上半身の人の黒いシルエット。肩の下に

は白く文字が書いてある。

セバスタン (Sebastian)。太郎。田中年男。

「何だこれは」私はメイに振り返った。

寢室の入口からメイは心配そうに言った。「分かる？おつとうを殺した犯人」

私は最初の画用紙に目を戻した。くたばったシルエットの下の方に、丁寧な達筆で「おつとう」と書かれていた。

「私は殺されてしまったのか？」無念そうに目を瞑りながらもメイは頷いたので、私はなんともいえない悲しさを抱えながら、私の真つ黒な死体の上にもう一枚、小さく破られた画用紙が配置されていることに気付いた。

「犯人名」そう読める。私のシルエットの右手が不自然なところで内側に曲がっており、不自然なのはメイの画力の個性だとして、伸ばされた腕の先の人差し指が無念そうに「一」の伸ばし棒端に横たわるように配置されている。

「一」の最後の方が恨めしそうにインクを散らして途切れていた。「これは一」

「一ダイイングメッセージ」息を殺すような声でメイが呟いた。変な言葉ばかり覚えるなよ。

「三人の誰かが犯人なんだけど、分かる？」メイの表情は真剣そのものだった。私は唇を指で撫でた。

そして布団を背にした。「コーヒーを飲み干したとき、犯人もまた干されるであろう」
振り返るとメイは首を傾げていた。

「いまいちか。私はとりあえず有言実行するか、ということまでテーブルに向かったのだった。」

「犯人はタナカ？」

私がコーヒーを飲み干すと、メイは待つていたかのように私の方にテーブルから身を乗り出した。

「うん」

「やっぱり！」メイが叫んだ。

私は慌てて両手を振った。「あ、違う違う。解説を始めようと思っただけだ」

「え、違うの……」メイはそっかあ、と呟いた。

「ごめんごめん。それは説明してからにしよう」じゃあ寝室に行こうか、私は席を立った。

そして「そういえば、何で田中年男が犯人だと思った」と聞いた。

「……名前が、怪しいから」

「まあ……確かに」私はうつむいたメイを見てから寝室のドアを開けた。

画用紙などはそのまま、こうして全体を見ると散らかった様子がよく分かる。

「後で片付けなきゃな」

「何？」

「いや、何でもない。じゃあ解決の時間だ」私は布団の上を指差した。

「私の……被害者のダイイングメッセージ。やっぱりこれがその字の通り犯人の名前を表している」

メイはうんうん、と眉間に小さな皺を作り真剣に聞き入っている。

「犯人名——、一見すると犯人の正体を書きだそうとして途中で絶命したかと思ってしまうが、実はこれが犯人

の名前をそのまま表している」

「えー」メイは王道な反応をした。私の口元がつい緩んだ。

「でも、なんで途中で死んじゃったわけじゃないって分かるの？」私はメイに水を挿された気分になった。

「私が無念のまま死ぬことなんて無いからだよ」

「……おつとうすごい」メイは心底感心したようにそう呟いた。

私は小さく咳払いをした。「……じゃあ推理に戻ろう。Sebastien、太郎、田中年男。ダイイングメッセー

ジを良く見てみたまえ」

うーん。文字通り食いつくように、布団の上に乗ってメイは画用紙を睨み込んだ。

「だめえ。分かんない」メイは白旗を上げると後ろに倒れこんだ。

「じゃあ、一字づつ、割って見てみなさい」

ううん……。メイは少し億劫そうにまた布団を覗きこんだ。「犯……人……名………あつ」

「そう。名の字こそが被害者のダイニングメッセージだったんだ」私はうつむき、眉間を指で抑えた。

「つまり、私を殺した犯人とは……」「タローくん!」メイが叫んだ。

「……」太郎のシルエットを指差していた私は、締めるところを奪われ、膨れ上がった探偵気分が一気に逆流し、構えた私の顔を僅かに赤くした。「ご名答」

「でも、でも……」風呂でも入ろう、と萎えた気分語りかけ寝室を出ようとした私にメイが立ちふさがった。

「太郎くんはおつとうに不当な利子を請求されて家を担保に奪われちゃったんだよ」一息でメイがそう言った。

「……なんで?」私にとって二つの「なんで」だった。

「太郎くんがおつとうに高額なお金を借りて競馬と女につき込んだって……」

「……立派な犯行動機だな。それ、ビデオで見たのか?」

「ううん。モンローさんが出してくれたクイズなの。犯人が分かったらアンフィステッキくれるの」

「えつと……。どこの方?」

「ええと、公園の近くのおもちゃ屋さんら辺の道」

十五時以降なら、と散歩を許可していた。子供が毎日、日が沈むまで家に閉じ込められるのなんて酷すぎると思っただけだからだ。勿論携帯電話を持たせた。私の携帯に着信がくれば、私が飛んでいくことになっている。知り合いができ

るのは悪くないことだが……。

顔ぐらい見に行く必要はあるだろう。

モンローさんか……。

私を殺しやがって。私はすべての画用紙を裏返して重ね、玄関の古新聞の上に置いた。

「いたか？」玄関で靴を脱ぎながら私はそう言った。

「うん。いた」ポットに向かいながら、少し興奮気味な口調でメイはそう言った。

「話してきたのか？」そう聞きながら私はテーブルについた。

「ううん。陰からこつそり覗いただけ」コーヒーと氷の入っていない麦茶をテーブルにおき、お盆を胸に抱えメイはそう言った。「めしあがれ」

「ああ。ありがとう」いただきます、そう言つて私はコーヒーに口をつけた。

時計が十八時を示していた。

メイが麦茶を飲み干し、「じゃあ行こうか」私がコーヒーの最後の一口を飲み干してそう言った。

「うん！」メイは椅子の下から屯着を取り上げ、立ちあがった。抜かりはないようだった。

「じゃあ…私は動きやすい服にでも着替えてくるか……」ちょっと待つてくれ、そう言つて私はいそいそと寝室に入った。

「よし！行こう」

「うん！」

そして私達は家を出た。

マンションを出て右と左に分かれた道を公園の方に向かった。

私達の生活区画を正方形とする。その中心を私達のマンションとする。左上角が近工駅。すると枠の右縦線の真中が小森公園の入り口だ。そして上枠線の真中とマンションを繋ぐ線のこれまた真中辺りに喫茶タナカがある。

メイのいう「おもちゃ屋ら辺」は小森公園と上枠線真中をつなぐ線の真中辺りになる。つまり全体の右上ら辺にあたる。

「メイ、そんなに急ぐ必要もないだろう。裾を踏むぞ」コッコッコツとつかかけを忙しく鳴らすメイに言った。

「うん」そう答えてもメイは着物の狭い歩幅で早歩きを続けた。

小森公園の入り口が見えると正方形の上に向かつて曲がり、公園を囲む灰色の塀から頭を覗かせる青々とした木々たちを右手に見上げ、眺めながら進んだ。

同じようにメイは私の前で、夜との違いを見るように公園を見上げ、進んだ。

しばらく歩くと、公園の塀に埋まるように、小さな窪みの中に地蔵が一体置いてあった。

「なんだか潰されてしまいうな地蔵だな」通り過ぎながら、押し込まれたように居る地蔵を少し不憫に思った。

「大丈夫だよ」メイは後ろ向きになって地蔵に笑顔を向けながら言った。

きつぱりと述べたメイを意外に思い「なんでだ？」私はそう聞いた。

メイは地蔵に手を振り、前に向き直った。「お地蔵さんは飛べるんだよ」

「・・・そうなのか」地蔵が飛ぶのは、私の世界ではひどく不格好だった。

「うん、むかし火事するとき飛んだんだよ、つておっかあが言ってた」

「おっかあが・・・」

「うん、だから大丈夫なんだよ」メイは得意気に言い、「おっとう？」と顔を覗きこんだ。

目に入ったメイの顔が不安そうだった。私は自分の顔が沈んでいたことに気付き、顔を上げた。「それは知らなかった」そして「じゃあこれは知ってるか」そう言っただけから、メイの顔を指差した。

メイはそつちを見上げ「かき？」と言った。

「そう。美味そうな柿だ。だから今年の冬は寒くなる」

メイは眉をしかめ、首を傾げた。「なんで？」

私は顎でもう一度柿の木を指した。「ああいう風に、見事なオレンジ色の柿ができるのは、今年の冬が寒くなるからなんだよ」

「へえ」感心するような、困惑するようにメイは通り過ぎる柿の木を熱心に眺めた。

私はそんなメイの横顔を眺めた。冬になれば、メイも過ごしやすいだろう。日傘をさすこともなく。そしたらピクニックに行ける。それよりも、子供らしく、雪合戦もできるかもしれない。

私がやると不格好かな。そんなことを考えていると「いた」メイが転んだ。

「大丈夫か」駆けより両手を前に着いたメイを抱き起こした。メイは顔をしかめているが、別に顔を曇りにうつむかせることもなかった。裾の長い着物で良かった。膝をさわっても「痛くない」と照れるように言った。私はメイの手をとり、汚れた手の平をハンカチで拭いた。準備に念の入ったメイに対抗して色々持ってきて良かった。メイは「ありがとう」と言っただけで反省するようにうつむいた。

「休憩するか」私はメイを近くの駐車場の柵の石台に持っていき、「だいじょう」……ぶと言おうとしたメイを置いて私は隣に座った。「私が一服したい」

うそ……と呟きかけたメイに「ああ生き返る」と私は缶コーヒーをグイと一息で飲み干した。「ほら。麦茶。生き返れ」とメイにペットボトルを渡した。

メイは困惑と笑みの混ざったような表情だったが、ペットボトルを受け取り、笑みが勝ち、そして麦茶を一息で飲み干した。正直驚いた私に「一回死んで生き返ったみたい」とメイは笑いかけた。

「で、モンローさんはどんな人なんだ？」おもちゃ屋ら辺を間近に控え、隣で歩くメイに問いかけた。

私と繋いだ手を振りながら「仕事のない人」と少し上を見てからメイはそう答えた。

モンローさんという仕事がなくてメイにクイズを出してプレゼントをくれる私を殺した女の人。

「面白そうなんだ」

「うん。面白い人だよ」でもそう答えたメイは少し機嫌が悪そうだった。「メイ。怒ってないか」

「うん。だって太郎くんを犯人にするなんて」すねる様にそう言った。

私は失笑した。私が殺されたのはいいのかなあ。

私がそう考えていると、「あ。あそこ！」メイが指差した。

指差す先には、地面に赤々とけばけばしいレジャーシートを広げ、その上で沢山の雑貨と派手に座る、見る限りホームレスの人が見えた。インドかどこかの修行を終えた、お爺さんにも見える。

「男…？」目に優しくない全体像が近づいていくに連れ、近づいて行きたくない。倦怠感が私の顔にぶら下がっていった。

「お。メイさんじゃあないか」大きく藤娘の描かれた手ぬぐいを頭に巻いたお爺さんが親しげに手を上げた。お爺さんの動きに合わせて、手ぬぐいからはみだした長髪が揺れた。

「今日は」メイが大雑把に頭を下げた。顔はやはり、ふてくされている。

「ああ。今日は。今日も可愛いね」あぐらをかいたまま、綺麗とは言い難いお爺さんは降ろした手でメイの肩をバンバン叩いた。そしてメイの隣に立つ私に目を向けた。

「はじめまして。メイの父です」私はメイよりは丁寧な、事務的に頭を下げた。

「おお。これが噂のおっとう様か。イヤイヤ、丁寧な方だ。はじめまして」そう言って私と握手した。

「で。謎が解けたのかな」目線だけをメイにやり、先生が生徒を指導するように言った。

「うん」と頷き喋ろうとしたメイをモンローさんは手で制し、「悪いが、今いいところだ。ちょっと待ってくれ」と言った。

顔を強張らせたお爺さんの視線は私達の左後方に向かっていた。ここは逆L字型になっている道路の外側の角に当る。私は左手の道に視線を向けた。お爺さんのほぼ向かい側におもちゃ屋があった。どこの町にもありそうな、こじんまりとした、人気も流行もない、玩具屋さんだ。前には自転車が三台止まっていた。

「あつ」メイが私の横で小さく高く声をあげた。おもちゃ屋をちよつと先に行つたところで犬が横に寝そべっていた。微動もしない。腹の部分が真赤に染まつていて、手や顔など全身にも斑点のように血の色がついていた。

「いいところ？」私はお爺さんを振りかえつた。

「その通り。座して待て」お爺さんが絨毯の上を手の平で叩いた。メイが私を見上げた。

「おい。止めんか」犬のところへ向かつた私の背中にお爺さんの怒鳴り声が響いた。犬の寝転がるコンクリートの地面は冷たそうで、とりあえず私にとって安らかな場所ではなかつた。気にせずに進む私に再度お爺さんが大声を放つた。「子供がどうなつてもいいのか」

私はお爺さんを振りかえつた。メイはお爺さんから数歩距離をとり、耳を塞いでいた。自然と目に力が籠つた。

「勘違いするな。お前さんのじゃない。見てみる」歩み寄つた私に動することもなく、お爺さんは顎で私の後ろをしゃくつた。私はおもちゃ屋を見た。

「あの犬死んじやつたの？」そう聞いてきたメイの頭に手を乗せ、私はお爺さんの方を向いた。

「説明してくれなければ分かりませんが」

「だから言っただろ。今いいところだつて」顎の白い髭をぼりぼり掻き、お爺さんはまた自分の隣をバンバン叩いた。私もメイも座ろうとはしなかった。

そして後ろで鈴の音がした。おもちゃ屋のドアが開き、子供が賑やかに出てきた。三人の男の子は小学生ぐらいに見える、メイよりは上の学年だろう。私がお爺さんを見ると、お爺さんは黙つてうなづいた。

「おい犬の死体だぜ」とふとつちよの子が言った。「まじかよ」「まじで」残りの眼鏡と茶髪の子達が言った。

すぐに犬は子供三人に包囲された。「血すげー」「ほんとに死んでんのかな」「こういうの触ると病気になるって死んじやうんだぜ」

ふとつちよが足でつつついた。「かてえー！」

「まじで？」他の二人も続いた。

「こりや死んじまっただろ」

「仮死状態かもよ」

「どっか自然の中とかに連れてつてあげたいね」眼鏡の子が言った。

「じゃあお前運べよ」ふとつちよが言った。「触ったら感染するからちゅーいしろよ」茶髪が言った。早くしろよ、ふとつちよが急かした。やばいって、茶髪が警告した。

「…死んだら親が悲しむから、止めとく」眼鏡がうつむいて呟いた。

「ちっ。根性無し」ふとつちよが言った。「口だけだ」

「いや、命にかかわるって」茶髪が言った。「しかし本当にすげーな、血」

好奇心を一通り味わった子供達は口を止めることなく、自転車へと向かった。

三人が自転車に乗り込んだ。

「死んだ生き物はただの肉だしね」三人の誰かがそう言ったのが聞こえた。

そして、棒状のものが宙を舞った。感情もなく、大きく弧を描きながら、三台の自転車の内の一台の車輪の隙間に挟まった。その杖がお爺さんの手元から飛ばされたとき、その自転車が倒れ、他の二台もドミノ式に子供達も含め、続いて倒れていった。

「うわ」三人三様に声をあげ、三人共こつちを見た。「何すんだよ！」ふとつちよが言った。他の二人は萎縮していた、たまに思いたしたように、いてーなどと呟いていた。お爺さんは友の敵を見るような形相で三人を見据えていた。「お前等どこに行く」箆らせたような、ドスの効いた嫌な声だった。

ふとつちよと眼鏡が黙り、茶髪が「危ないじゃないか」と言った。声が震えていた。

「可哀そうな犬を置いていくのか」恐面の表情を微動させずお爺さんが言った。

「関係ねーだろ」ばつが悪そうにふとつちよが言った。

「引き取る者もない、一人で、孤独に死んでいくこの生き物に何かしてやろうと思わないのか！」お爺さんが叫んだ。ふとつちよの肩が大きく揺れた。

「だつて」擦りむいた膝小僧を抑え、眼鏡が言った。「触ると病気になっちゃうんだよ？」今にも泣きだしそうだ。

「手袋をすればいい。お前達がさつきやったように足で何かの上に乗せて、運ぶのもいいだろう」

「言い訳をするな！」お爺さんはそう叱責した。私は耳を塞ぐメイの肩を抱き寄せた。

「じゃあ、あなたがやればいいじゃないか」茶髪が裏返った声で叫んだ。

「他の人がやればいい。そう言いたいのか！」物を掴んだお爺さんに私は右手を伸ばし制止した。

「ごめんなさい。メイが怖がっているの」私はそう言って少年に近づき、顎で帰宅を促した。モンローさんが私

に細めた視線をぶつけた。

三人はお互いの目を合わせ、戸惑う手つきで自転車に乗った。漕ぎ出すための準備のようにこつちを見た三人に「命に敬意を払え」お爺さんは睨みつけ、そう低く言い、そして「元だけを薄く笑わせた。「後悔するぞ」そう付け加えた。三人の表情がつまつたように動きを失った。

そして「なんだよ」と呟き「こじきが偉そうにしてんじゃねえよ！」とふとつちよは言い捨てペダルに足をかけた。残りの二人も続き、三人は早々と走り去つて行つた。くそジジイ！遠くから何回かそう聞こえた。

そして三人の姿が見えなくなった。

私は溜息をつき、犬のところへと向かった。メイも小走りで続いた。

「生きてる？」額に汗を浮かべ、メイはそう聞いた。息も少し荒い。状況に疲れたのだろう。

「多分」私は首を振つた。死んでしまったのは結構前だろう。あの子供が言つたように死後硬直が全身にきていた。

「じゃあ、ちよつと埋めてくる」私はそう言つて子犬を持ち上げた。捨て犬だろうか。首輪は付いていなかった。

「私も、行く」メイが横についた。

「大丈夫か」私がそう見下ろすと、メイは疲れたように、でも笑顔で言つた。「うん。大丈夫」

「そうか」メイをここに残すのは酷だった。そのくらい私が気をきかすべきだった。そんな気遣いもできないとは、私も気が立っているのかもしれない。モンローさんに？いや、小学生が説教されようがお爺さんがジジイと呼ばれようが、私は多分変わらない。

きつと、犬の孤独とメイの戸惑いが放置されたのと、なにより自分がそれを解消できなかつたのが、許せないのだ。

「行こう」私はメイにそう言つて、お爺さんの方向にお辞儀をした。そして私達は来た道へと歩を向けた。

「こつちだ」立ちあがつていたお爺さんが目の前のアパートの中を杖で指した。「近道がある」

アパートの通路の先に脇道があり、その先に小さな雑草に囲まれた入り口があった。私達三人はそこから公園に入り、公園の端で木の密集した人気がない一角の松の木の下に埋めた。黙禱を終えるまで三人共黙っていた。

「で、犯人は？」戻り道、お爺さんがメイに聞いた。

私は肩に触れメイを促した。「……太郎くん」メイがお爺さんに言った。

「それはおつとうさんの答えではないかな」お爺さんが杖で私を指した。私は答えた。「そうです。メイは太郎くんがそんなことをするのが許せないですよ」視界で不愉快に引つ掛かる杖の先が下ろされ、お爺さんが鼻で笑った。「で。メイちゃんは誰が犯人だと思うの」

「違うの？」メイが聞き、お爺さんが勿体ぶるように首を傾げた。

おもちゃ屋向かいの赤い絨毯の前に着いた。

「分かんない。でもセバスチャンも太郎くんも殺人するわけないし、おつとうが殺されるわけない」語尾を強く、メイはそう答えた。

お爺ちゃんは微笑み、古布で縫い合わされたツギハギの袋から見たことのある杖を取り出した。「その通りだ。それが正解だよ。それを忘れないようにな」そう言つて An f i s テッキをメイに渡した。

わあ、と小さな歓声を上げ、メイはそれを受け取った。私を見た嬉しそうなメイに、私が薄く微笑み頷くと「ありがとうもんろーさん」とメイは嬉しそうにそれを小さく天に掲げた。

「ありがとうございます」私がお辞儀すると「また来なさい」お爺さんはそう言つて絨毯の上に胡坐をかいた。

それを一目し「じゃあ」そう言つてメイの背に手をやり、私達はお爺さんに背を向けた。

「ワシだって、本当は怒りたくないんだよ」背中越しにお爺さんの声が聞こえた。

振り向いた私に「すべて子供の未来のためだ」そうお爺さんが言い伏せるように言った。

私は少し口を笑わせお辞儀をした。そして顔を少し困惑させたメイの手をとり、帰り道へと向き直った。「もちろんさんありがとうございます」メイがお礼を言い、私達は歩き出した。

「傍観は、静かであれど何も生み出さん。あんたは逃げてるだけだ」背後から聞こえた声に私は振り向かず、私達は家路についた。

二十時。私とメイは日の消えた帰り道を黙って歩いていった。

「あの人もぬくもりが欲しいから熱を投げるの？」メイの履くつつかけの乾いた足音に合わせるようにメイの声が暗がりに響いた。

熱を投げる。その意味を私が完全に理解できているかは分からなかった。「私が熱を投げていたのはどんな時だ？」メイがほうけたように顔をこっちに向けた。「おっとうが？ないよ」

怒る、と同意でいいのだろうか。「あの人ってモンローさん？」

「うん」

「あの人は…、ぬくもり、突き詰めればそうなるのかも知れないが」

子供のため、と言っていた。道徳教育のつもりなのだろう。でも、優しく諭すことはできないのだろうか。私には怒ることが誰かのため、とはどうしても思えないのだ。結果、誰かのためになつたとしても。結局イラつくから、怒る。それに尽きると思うのだ。「いや、子供のため、と言っていたね」

「あの三人の男の子？あの子達のためになるの？あんなに投げつけられて子供たちは乱れてたのに？」

「きつとあの人は思いやりを教えたかったんだ。熱をぶつける、ということは普通に言うよりも相手の頭に印象深く残る。モンローさんの言葉があの子達の頭の中で転がり、時間をかけて、たくさんの出来事と共に、その通りにすべきだったんだ、モンローさんは正しかった、と教訓になる可能性は十分あると思う」

「犬をほおつておくのが悪いことだったの？」

「分らない。命を軽く扱うのはいけないと思うが、死んでしまったものを供養しなければならぬか、と云えば、私は、そうしたい人がそうすればいいと思う。でも、そういう他の命を思いやれる、心に優しい余裕を持った人は素敵だと思ふよ」

「おつとうは埋めたのに、なんで最後、もんろーさんはおつとうに熱をぶつけたの？」

「私は熱を投げるのが嫌いだ。投げられるのが嫌だから。私は自分が自分の好きな様であればいいと思っている。他の人は他の人、私に迷惑がかからなければいいと思っている。でもそれではあの子たちは何も変わらない。モンローさんはあの子達を優しい人になしようと頑張っていたから、私が許せなかったのかもしれない」

「・・・おつとうが熱を投げるときはある？」

「そうだな・・・自分に熱を投げられて、私がそれに我慢できないとき、かな」

メイはそれからまたしばらく黙った。

「その時おつとうは何のために熱を投げるの？」

何のために。私はメイを見た。私にいままでそんな質問をした人はいない。私は話を自分から逃すのを今までごく自然に、呼吸をするように行ってきた。子供はある意味論理的だ。ただまっすぐにその無垢な眼で疑問を突き詰めていく。私は返す言葉につまった。暗い空を見た。会話で不意をつかれたのなど、何年振りだろうか。それとも、私はメイに心を許しているのだろうか。メイにすがろうとしているのだろうか。暗い空は不自然に明るく、星は薄く、安く見えた。

「やっぱり、・・・ぬくもりのためなのかもしれないなあ」

「モンローさんが怒ったのは、私が臆病だから。私が熱を投げないのは嫌われるのを怖がっているから。でも、本

当に暖かいぬくもりを得ようとするのなら、たまには熱をぶつけあつても、お互いを知るべきなのかもしれない。ぶつけあつて、お互いの底を見せあうべきかもしれない。底の様子を」

潰されたメイの右手の感触に気付き、私は慌てて自分から離れた。手に力がいっていた。「あ、すまない」

メイは私の左手を強く、だがやはり子供の力で握った。「大丈夫」メイの手が涼しく、私の頭を静かに冷やしてくれた。私は微笑み、柔らかくメイの右手を握り直し、二人で、のんびりと涼しく夜道を進んだ。

「熱をぶつけあわないと、お互い知りあえないの……」メイがそんなことを呟いた。

「これいらない？」濃青色の布切れを右手でかかげ、メイがそう聞いてきた。

「ああ。欲しいならどうぞ」風呂から上がり、ミネラルウォーターを冷蔵庫から取りだした私はそう答えた。

「ありがとう」そう言つてメイは寝室へとバタバタ入り、ドアを閉めた。

むかし自作でシャツをこしらえたとき使つた布生地の余りだ。夜中の人外な海を象徴するような、沈んだ青が気に入り、残つた切れ端も鍋挿みの代用として台所に干して置いたのだ。使つてはいないが。

何に使うのだろう。グラス一杯の冷たい水を飲み、台所で一服しながら作つたシャツの行方を暇に考えた。

しばらくしてメイが出てきた。今日の昼も着ていたメイ唯一私物の消炭色の麻着物を着ていた。少し背後に回した両腕の袖が両手が隠れるほど長くなっている。濃青色の袖がメイの手首から先に付け縫われていた。両腕を前に出せば、うらめしやー、と呟く権利が得られそうだった。

「どうしたんだ」私は椅子から立ち上がり、好奇心で眼を袖に向けた。

「ん、ちよつと」メイは何でもなさそうにそう言つて、私の横をすり抜け台所に向かった。愛用の湯飲みをテーブルに置き、冷蔵庫から麦茶のデキャンタを取りだし、注ぎ、デキャンタを冷蔵庫に戻して、冷蔵庫を閉めた。両手を

使わず行つた一連の作業は私に違和感を与えた。

「左手、怪我でもしたか」私の向かいに座り、やはり右手で麦茶を飲むメイに聞いた。

「ううん。ちよつと疲れただけ」そう言うメイの表情は、まるで悪戯を見つけたような顔に見えた。

「ちよつと左手見せて」

メイの表情が色を失つた。

メイの顔が哀しいものとなり、そして私の胸に小さく寒気が走つた。何回も見た暗い顔と違う。辿りついたメイの表情は、この世への何らかの姿勢も伺えないものになつていた。疲れた、確かにそう述べられれば遺言として納得できそうだった。

固まつた視界で、メイの左腕がテーブルの上にあがつた。

私に向けられた濃青色の袖先は垂直に垂れてメイの左手に被さつていた。私は自分の左手を伸ばし、メイの左手を握つた。濃青色の絹は潰れることなく、私の手に細い腕の感触を与えた。

私は両手でメイの左袖をまくつた。

見えたのは円形の海の泡のような色の、腕の断面だった。左手が、ない。

私の口から疑問の言葉がかすれて細切れとなつて出た。

「左手は……」やつと形にできた言葉も疑問だった。

私の両手に掴まれたメイの左腕に力が入つた。「あ、すまない」メイは口を薄く微笑ませ、私が両手を離すと逃れるように左腕を引いてテーブルの下にやつた。「熱がつてたら、消えちゃつた」

消えるわけがないだろう。

でも、医学の出番はなさそうだった。釣りと三途の川くらい、進歩著しい科学とは違う属性に見えた。

「いつ」私は質問を繰り返した。

「ざつき。もんろーさんが怒鳴ったとき」

「直らないのか」

「分かんない」私は馬鹿なことを聞いた自分が情けなくなった。当の本人が一番不安だ。不安をぶつけてもらおう保護者のはずが、真逆だった。

「大丈夫。別にわたしは生きてるし」仮にも自分の子供に、六歳で生きていることに喜びを見出すようになって欲しくはなかった。「左手だけか？」

「うん」

「痛くは無いか」

「うん、いたくない」

「熱に当らなければいいんだな」

「うん。たぶん」

「じゃあ。TVでも見よう」私は立ちあがりTVの前のソファアに向かった。

「うん」メイはそう答え私の隣に座った。

私はメイを持ち上げ、自分の膝の上ののつけた。メイが、あ、と呟き、少し座り加減に困ったような様子を見せた。私が体に腕を回すと、メイはおとなしく私の体に背中を預けた。

「暑くないか」

「少し。でも心地いい」メイが私の腕に右手を当て、頭を私の胸に寄りかからせた。手の僅かな震えが悟られないか、少し心配だった。

「おつとう」そしてメイが呟いた。

「うん」

「わたしは普通じゃない？」

「いや。普通の、いや、私にとつては特別な普通の女の子だ」

「なにそれ」メイが少し笑った。

両手の中の体は小さく脆く、でも私にとつて暖かな確かさだった。これから私は、どうしようか。少し考えた。

ヤシの木の下にいた。私が真ん中。右手にメイ。左手に白い女。三人並んで歩いていた。

少し、出掛けてくるね。

メイがそう言つて鍵を開けて行つた。

私と白い女は部屋で愛し合つた。

ふと目が覚めた。隣を見るとメイがいなかった。メイの携帯に電話を掛けた。出なかつた。私はパソコンのスイッチを押し、換気扇に向かい、煙草に火をつけた。パソコンが起動すると、私はメイの居場所の地図を印刷した。迷子サーチの機能が付いた携帯にしておいてよかつた。

駅を越えるのか。結構離れた場所だった。私は厚手のシャツを羽織り、外へ出た。

十分ほど走つて駅の周辺に着き、私はメイの居場所を携帯で確認した。家で印刷した地図の示す居場所から移動していながつた。

さらに五分ほどかけて辿りついたその場所は住宅街の中の一軒だった。暗い道に三・四人ほどの人だけが確認で

きた。高校性ぐらゐの男が二人。同じ年頃の女の子が一人。あと小学生ぐらゐの子が一人いた。近くには大きな梯子が倒れていた。

私は走つて近寄り、「ちよつとすいません」とその中心を覗いた。

「モンローさん」頭に血を流して倒れるモンローさんがいた。返事はなかった。

「何があつたんですか」私は近くの高校生ぐらゐの男に声をかけた。

「あなた、こいつと知りあいなのか」その黒坊主の男の声は震えていた。

「一回話したことがある」私はそう答えた。泣き顔の小学生がこのあいだモンローさんが叱つた眼鏡の少年だと気付いた。「救急車はもう呼んだんですか」私が聞くと女の子が首を振つた。私は携帯を取り、一一九を押した。

「違ふんだよ」もう一人のアフロの男が、しがみついて来る勢いで言つた。

「この子の部屋に侵入してきたんだよ」顎で眼鏡の少年を指し、アフロの男は続けた。

「幽霊が出た、つてこの子が部屋に泣いてきたから、こいつの兄貴と一緒にこの子の部屋に行つたんだよ」指で黒坊主を指した。眼鏡の兄が黒坊主で、他の二人はその友達のような。

「したら窓が開いてさ、この子は閉めて寝たつていうんだ。その二階だよ」そういつて後ろの家を指した。

「んで、物が勝手に落ちて、この子が、犬の呪いだ、つて言うんだよ。気味が悪くなつて電気をつけたんだ。そしてたら部屋一面に犬の足跡が着いてたんだ。全部こいつの仕業だぜ!？」そういつてまだむさんを責めるように指差した。

「それで窓にこいつを見つけて聡史が捕まえようとしたんだ」黒坊主のことだろう。「こいつわざわざ梯子まで用意して二階の窓に張り付けてやがった。呪うぞーなんて言いやがつて。そしてたら梯子が倒れた。悪いのはこいつだ。不法侵入だよ。狂つてやがる」

お前もバット振りまわしただろ、黒坊主、聡史が呟いた。「なんだと」アフロが聡史に掴みかかった。やめてよ、と女が声をあげた。

救急車を呼んだ。「何すんだよ！」怒鳴ったアフロを無視して、眼鏡の小学生に聞いた。「私の娘…小さな和服の女の子がいなかったか？」

眼鏡の子が頷いた。

「中年の男に連れていかれたよ」女の子がそう答えた。

「どこに」私は女の子に聞いた。

「私たちが、家から出てこのお爺さんが血を流して倒れてて、どうしたらいいか絶句したら、和服の女の子が、大丈夫？ってお爺さんに走り寄って、なんか…話したあと、シャツに黒い蝶ネクタイのおじさんが通りかかって、お前が…とかなんとか言っつて、こつち来い、つて手引つ張つて連れていっちゃった」

「どこに」ともう一度聞くと「分かんない」と女の子は首を振った。学校の内申取り消されたらどうしよう、女の子がうずくまった。

私は携帯を取りだし、メイの居場所を調べた。Receiving page…の表示が長い間消えず、そして居場所が出た。

あの喫茶店だった。

「ちよっと待て」

走りだそうとした私の背後で、モンローさんの声があった。

モンローさんを取り巻いていた少年達が一步、後ずさった。そうして見えたモンローさんはさつきと同じく地面で仰向けにくったりとしており、目も閉じたままだった。

「場所は分かっているんだろう。一言聞いて行け。メイさんに関することだ」口だけが動き、発せられた声は掠れ

ていながらも威厳をきかせた声だった。

私はモンローさんに歩み寄り「なんですか」とひざまづいて聞いた。

「メイさんが来た。多分さつきだ。真夜中に入り始めた頃だろう。ワシが、こんな時間に危ないだろう、と言うよりも早くメイさんは、ね、モンローさん、と私に質問した。人とずっと一緒にいるには熱をぶつけ合わないといけなの、とね」

私の胸に、針のような小さな衝撃が刺された。

「ワシが、それを感情をぶつけあうことだと解釈するには、少し時間がかかった。それで、ワシはそうだ、といった。人間苦労なしで愛を得ることはできない、とな。愛について軽く説明もさせられたがな…。そしてここに連れてきた」私は白くなった頭で立ちあがり、駆けだした。「おまえも、時には汚くても無様でも戦え。逃げるな」去る私の背中にモンローさんは弱った叫び声をぶつけた。

そんなに、単純じゃない。

私は走った。

しばらくして忙しいサイレン音が耳に入り、赤い光が視界をかすめた。

喫茶店タナカは、当然といえば当然だが閉店していた。小さなガラスの壁から見える店内は真っ暗で静まりかえっていた。当然誰も見えない。

私は携帯を取りだし再度、メイの居場所を確認した。サーチ中の表示が消えない画面を見ると、ドアを開ける音がした。目を向けると女の人が喫茶のドアの中へ入っていくのが見えた。私服だが、あの女の店員だった。

私は閉まったドアに走り寄り、静かにノブを下げた。ドアはゆっくりと開いた。だが、途中で固い手応えが僅かな

隙間以上開くことを拒否した。

チェーンロックがかかっていた。なぜ鍵をかけないんだろうか。

隙間から中を覗くと「店長、こんな夜中に何の用ですか」少し寝惚けたような声が聞こえた。

しばらくの間の後、店長の声がした。「こんな遅くにすまない。だがそれだけの用事がある」

そしてまた一間があり店長は語り始めた。「君は最近ずつと機嫌が悪かった」それは……と何かを言おうとした女店員の声が聞こえ、黙った。

携帯の画面がメイの居場所が現在、この店であることを表示した。

「分かつてる。それは私が、あの客を、警察に通報したからだろう？それでも後日また店に来てくれて、しかもあの子を預かった御礼まで言ってくれた彼に、私が謝りもしなかったからと言いたいんだろう」

ちよつと違う、女店員の、もう覚醒した声がそう呟かれたと思う。

「でもあれはおかしい。挙動もよそよそしかったし、母親も見ない、なにより親子で敬語を使うのがおかしい。誘拐がそれほど珍しい時代でもあるまい。私は正しかった」

しばしの沈黙。「いや、そんなことが言いたいんじゃないやなかった。でも私は今日謝ろうとした。君のために」店長の個人的な感情のために、他の関係者を入れないためのチェーンロックだとわかった。「さつき店を閉めた帰りにあの子を見つけたんだ。あの子はホームレスと一緒にどっかに移動しているところだった。ホームレスは大きな梯子と大きな袋を持っていた。私は後を追いかけた。この時から変だと思っていた。こんな夜中に、ホームレスと一緒に、大きな荷物を持って、何をしにいくんだ？怪しい、と」店長は続けた。

「それで移動が終わったと思ったら、あろうことか、どっかの家に梯子をかけて爺さんが二階の窓に登り始めた。通報しようと思ったが止めた。また間違いだったら阿呆だからね」不快に思う皮肉だった。

「爺さんが降りてくるのには時間がかかりそうだと思います、私はその子に近づいた。色々聞くつもりだった。親が心配して居るだろうと思っただよ。その途端梯子が倒れた。爺さんも一緒に地面に落ちてきた。梯子の下敷きになってね。その子が梯子を持ち上げようとした。右手だけで梯子を掴み、左手は梯子の下に入れて腕で持ち上げようとする、なんだか不自然な動きだった。私も梯子をどけようと近くに寄った」

冷たい焦りが私にこみ上げた。

「びつくりしたよ。左手が無いんだ。ただ無いんじゃないぞ。見てみる」

…。「え」

女店員の、驚嘆の一声が発せられた。

興奮を抑え込む声で店長が言った。「おかしいのはこの娘の方だったんだよ」

勝ち誇るような店長の囁く低い声が静かに響いた。そしてその音の尻尾に被さるように、あ、という小さな声を耳が捉えた。メイだ。私は脇を締めドアノブを掴んだ右手を一息に引いた。金属の弾けるような荒い音と共にドアが開いた。私はそのままうす暗い店内へと走り入った。そして止まることなく、放心しているメイを右目に捉え、メイに熱を当てつづけたであろう店長に向かって、一秒でも早く足を向かわせた。

「なんですか」迫っていく視界の中で、店長は顔を張りつめ、メイを掴んだ手を離れた。私は立ちすくむ店長の一步手前で強く左足を踏み出しブレーキをかけた、勢い余った力を右半身から回し、右足を捻り、腰を捻り、肩を入れて、一直線に、ただ見据え続けた店長の、腹に突きを差し込んだ。

店長がうずくまった。

そして店員が思いだしたように私に駆け寄り「やめて下さい！」と言った。

私はメイを思いだし、横でしゃがみ込むメイに駆け寄った。「大丈夫かメイ」そう言って肩に触れると、メイが一

瞬顔を歪め「アツ…」と言った。

私は手を離れた。そして興奮の余韻が残る足取りで店のコップを借りカルキの効いた水道水を一杯飲んだ。そうしたらメイを両手で持ち抱え、「ごめんなさい」と深くお辞儀をしてから店を出た。

店から離れ、人通りのなさそうな道を進み、街灯も当たらない暗がりにメイを下ろした。

「大丈夫か」

「うん。ちょっと驚いたけど…」眼の下に濃く影がきている。

「ちょっと待つてろ」少し息の荒いメイに冷たい飲み物を飲ませようと私は自動販売機を探そうと立ち上がった。

「あ、待つて」振り向くとメイが右手を伸ばし、私の移動を拒んでいた。私はメイの隣に腰かけた。

「ちょっと、一人は怖い」メイはそう言つてうつむき、両手で私の体にやんわりとしがみついた。そしてメイは小さく溜息をついた。右手もないのに今気付いたのだろうか。それはきつと何か物足りなくて、そしてメイを哀しくさせてしまふだろう。先ほど伸ばされた右腕の先に見えた泡白い断面。無くなつてしまったメイの両手。

あの野郎。

私の腹に赤い塊が煮え、沸きあがつてきた。

「だめ」メイがそう言つて腕の力を強めた。

私は真赤に染まった自分の思考に気付き、メイを見た。「ごめん」

すると私のうつむけた頭にメイの腕が触れ、涼しい吐息がかけられた。

私は両目を閉じ、傾けた頭をメイに預けた。音もなく白いそよ風が頭の中央を吹き抜けた。それは血液をささやかに巡り、私の体を内からひんやりと優しく撫でた。頭に添えられた腕を両手でそっと包んだ。私は薄暗く涼しい消炭色の意識の中でただメイの感触にすがった。これが、私が人に頼らず生きてきた代償なのだろうか。信仰にも似た強

く執着する場所だった。メイに守られていた、そう感じた。この瞬間、メイが私の意識に大きくその姿影を刻んだ。そして同時に強い不安が沸き起こり私は顔をあげ、メイの両腕をゆつくりと掴み、聞いた。

「メイ、君は、どうすれば無事でいられる？」

私から視線をそらすようにメイはうつむいた。

「普通の人と違うの？」私は返す言葉に詰まった。いや、とだけ私の口から出た音が暗い沈黙を漂い薄れて消えた。

「……公園の湖」メイの言葉が聞こえた。

「おつとうはあれに似てる」

「どうして？」

「霧の奥にありそうな、ひっそりとする、小さな波さえ立たない静かな湖。おつかあと同じでまるで浸かるようにただ静かでいれる場所。でも、おつかあよりは少し熱があった。でもそれはちよつと暑いのに、なんかずつとそこにいたい、私が色鮮やかになるような、素敵な気持ちになれた。もんろーさんはしつかりと大きなの、店員さんは小さくて深い、店長さんはまあまあ広くて浅いの。みんなひっそりとはしてなかったけど、それぞれに湖を持っていて、私はそれを見て面白かったし、それぞれに楽しませてもらったの。でも突然、熱い丸っこい塊が飛んできた。初めて気付いたのはデパートに行くとき、周囲で飛び交った。その時はちっちゃい虫が少し熱くて飛んでるな、ぐらいいしか思ってた。でも、もんろーさんや店員さんや店長さんの熱の玉がほっぺに当たったりして分かったの。みんなが投げるって。でも何で投げるのかわからなかった。最初は怖かった。でも、それが、あのヌクモリを手に入れるためだと、教わったでしょ。でも私は熱を投げたり、受けたりしなくても、おつとうのヌクモリに浸かることができた。でも、段々、心配になってきたの。なくなってしまうのかなって、まぼろしなのかなって。元々、あつくて気持ちいいなんて私はおかしいなって思ってたの。その内、私の奥に小さな灯りみたいな玉ができてのに気付いた。

綺麗だけど、ろうそくみたいに、その光に気付くと熱くて、まぶしくて、胸が勝手に熱を持って、それを手放したくない自分も怖かった。だって私の体には「熱すぎたから。抑え込むようなメイの声が、抑え込まれたように途切れ、再び無音が広がった。そこに、コン。と石にぶつかる軽い音がした。

私は地面に落ちたつかかけを見つけ、両手でそれを拾い、いとおしんでメイの足に当たった。でも履かせることはできなかつた。

もう、両足もなくなっていた。涼しい空気の感触だけが私の手に触れた。

メイが私に顔を向けた。「小森公園に行きたいんだけど、もう歩けないの」
眉の落ちた、口を一字に結んだ、メイの微笑が見えた。

「私がいるじゃないか」胸が絞られそうな感覚を踏み締めるように、私はメイを両手で抱えて立ちあがった。でも熱を当てないように、と心に言い聞かせ、私は公園へと歩き出した。

0時を過ぎた小森公園はやはり、日中への無関心さを意識させるほどの静寂と、酔うほどの身を切る冷たい風が吹いていた。

私は湖を囲う木の一つを背にメイを膝に抱えたまま腰を下ろした。「メイ、小湖に着いたよ」

私の腕の中で目を瞑るメイは、言われなくても、と言うように口をやわらかく微笑ませていた。

膝の上にかかるメイの重さは、まるで、中に空洞が空いてしまったかのように、軽く、人にしては頼りないものになつていた。

「おっとう」気力のようなものの消えてしまったメイの顔はロウソクのように白く、その口が動くのを見て、私は僅かな驚く感情を胸に浮かべてから答えた。

「ん、なんだ」

「おつとうの懐はこの湖によく似てる、けど奥の方、じーと眼をこらすとピンク色の火みたいなのがゆらゆら揺れているのが見えるの。私が見てれば見て、おつとうが一人でコーヒーを飲んでるときなんかに見えたんだけど、それはなんなの？」

「火？ピンク色の」火、ということとは情熱や衝動のたぐいなのだろうか。ピンク色とは、何をさすのだろうか。

そんなものは見たことがないので、私は答えに困った。だがメイの疑問に答えなかった。「私は……私には叶えない夢がある。そのために自分を、高めることをただ目指してきた。自分の生活に余計な制約や面倒な干渉がないよう、人との接触も必要最低限に留め、人に頼らず生きてきたつもりだ。そうしているうちに、夢を叶えることが私にとっての全てになった。決して他の人に語らず、ただ自分の奥底で夢への自分を鍛えてきた」そう言って、私は一つ小さく息をした。私は自分のことを話した。

これが答えになるのかは分からない、が、現在の私の生活のかたち、私の人間性を形づくっている、根底にあるのは、間違いなく夢への孤独な執着、であった。

だけど、と私は再度口を開いた。「孤独な過程を経て、手に入れる夢の先にはやっぱりぬくもりがあるよ。その瞬間、メイにも隣にいて欲しい、と私は思っている」喋ることによって辿りついた一つの望みは、メイが私の成功を隣で笑って、一緒にその瞬間を分かち合ってくれることだった。それは夢への原動力の一種となりうるものである。一緒に手をつないで、幸せを共有して……。

「メイ、なんで……君はどんどん軽くなつていく」胸を擦るように言葉を呟き出した。

メイが苦しそうな吐息を口から出した。

「何故だ。もう、君を苦しませる熱は、此処にはない。熱をぶつけあう必要性など……それが今までの私達の生活が証明してくれる。……短いけど、私にはそれが幸せだった。満たされ、居心地が最良で、成長していけるなんて

……これ以上のことはないんだ。熱をぶつける奴のいない生活はできる。苦しまなくていい筈なんだ……」そう言っ
て私は気付いた。

「私か……。私も、熱を出しているのか……。？」執着、努力を強いる要求。それは……。熱か？怒鳴らなかつたとしても、
それが私にとっては、善意からだとしても、メイにとっては、身を削る悪意か？

それと同時に、私が外界との接触のない生活を提案したことに気付き、自分の言葉に恐怖を感じた。

メイを抱える自分の両手、私は汗の滲むそれを、呪いのように見た。

「ちがう……。」メイが眼を開けることなく呟いた。

「わたしも、多分持ってしまったの。おつとつと繋いだ手、あのヌクモリがそのまま私の奥に小さく灯りになったの。
熱なのに、逃がしたくなかつた。でも、熱をぶつけあうのはやっぱり、わたしにはできなかつた。わたしはわがまま
になっちゃって、それが灯りを熱く、わたしを、じぶんを消していつてるの」

「そんな……。」掠れた息が喉から出た。

私にとって嬉しい想いがメイには、命取りだつた。でも……。それは……。人を好きになるとき、恋をしたとき、人の誰
もが、持つ感情じゃないのか。それじゃあ……。メイは……。

熱が私を支配した。身に染み付いたと思つていた冷静さも、他人を欲する気持ちでいとも簡単に、赤銅色の熱源に
変わった。答えが見えない。一步も進めない。何を正しいとすればいいのか。暑さで踊る頭の中、私はどう対処すれ
ばいいのか分からなかつた。モンローさんの言う通り、私は無力だつた。

額の一点が醒めた。小さく冷たい感触。私は眼を開けた。

メイは既に顔を離し、少し照れて、穏やかに私を見つめていた。「キスしちゃつた」

顔を浮かすのにさえ、疲れてしまったのかメイは少し途切れる声でそう言つた。

こんなに小さい存在が……。晴れた頭が、背筋の震えた感触と同時に、そう考えた。こんな小さなメイの気持ちが光明のように私に道を照らしてくれた。私は、メイを微笑えませる存在でありたい。

私は躊躇った。

「大丈夫……お願い」メイが頼んできた。

私はメイの体を少し持ち上げ、その額に、精一杯の想いを込めて浅く口付けをした。なんともないメイの額にほっとすると、メイは、本当に嬉しそうに、一杯に微笑んだ。「ありがとう」

私の胸が何らかの素早い衝動で満たされ、そしてその想いが冷えて重く潰されそうに苦しくなった。

「メイ……どうせ、熱いなら、全部言うんだ。今の気持ちを私に聞かせてくれ。君の熱は、僕を溶かさないんだから」驚きを持った大きな目で見つめるメイに、私は精一杯微笑んだ。するとメイは手のない腕で私にしがみついた。私も抱きしめ返した。

メイの体が少し震えた。私はなだめるように頭を撫でた。「ただ、言ってくればいい。思ったことをそのまま」発せられる嗚咽のような小さな声が何かの言葉を成してきた。「怖い……本当はしようがない、って分かっているのに。怖い、すごく怖い。消えてしまうのが。もつと一緒に、おつとと一緒にいたかったよ」始めて聞く、高まったメイの声、叫びが、嬉しく、果てしなく悲しく鋭く胸に響き渡った。「うん。私もだ」私は静かにメイを両手で包み続けた。ヌクモリでいられるように、消えないように。「ずっと一緒に」メイが顔を上げた。「ずっと、一緒？」

「うん。メイは消えないよ。例え、離れたとしても、絶対に再会してみせる」

しばらくの沈黙のあと、「うん……」とメイが呟いた。

私は自分の体の熱に気付き、慌てて距離をつくった。「熱くないか」

するとメイは四肢のない体をこっちに倒し「うん。大丈夫。本当は暑いんだけど、すごく、幸せ」と言った。「そうか。なら良かった」私はメイを包みなおし、頭を撫でた。

「これ……なんていえばいいんだろ。ヌクモリつて熱いけど、いつまでも、ここにいたい」

希薄になるメイの感触に私は震える喉で言った。「暖かい。そう言うんだ」

メイが微笑んだ。「おっとうって暖かい」そう言うと、肩にもたれているメイの頭が軽くなり、その手応えが、勢いの強い水を触っているような、確かに在るが、脆い、というものになった。

「メイ」メイを顔の前に持ち上げると、額の一点、口付けた場所から湖が見えた。透明になっていた。そして、メイの体が私の手を滑り、私のほうに倒れ、体を通り抜けて地面に向けて落下した。抱き起こそうと伸ばした手が空をきつた。

そして突然、霧が視界の一面を覆った。「メイ！」私は両手を振り伸ばし、メイの感触を探した。「止める」まるで、こっちがすごい速さで疾走しているように、勢い強い霧が辺り一面を舞い、私を混乱させた。

「メイ」私はメイを捜した。

そして霧が晴れると、いつもの小湖の風景が戻った。さっきまでいた木の根元に、メイはいなかった。

「メイ？」

口に出してもメイの姿は跡形もなく、ただ静けさとほろ寒さが私を暗く包んだ。

「タクシーを呼びますか」

靴を履いたところで、宿の主人が背後から声をかけてきた。

私は振り返り「いえ、すぐ、近くです。ありがとうございます」と軽く頭を下げた。そうですか、と言うように主人は微笑み、そして聞いた。「どちらへ」

「五百羅漢像なんかを」小さく足踏みをし、靴の馴染み具合を確かめた。

主人が遠慮がちに表情を作り、心配そうに口を開いた。「あれは、確かに壮観ですが、冬は雪が一面に積もっていて、観光客は勿論、地元の人も行きませんよ」

誠実そうな主人の様子に私は笑顔を向け「はい。気を付けます」と答えてから外に出た。

降り立った歩道の雪は浅いが、所々が透けて凍結していた。見渡す町並みの全てにこんもりと雪がかかっている。質素寂然とした町。よけられよせられた雪、茶色くつけられた足や車輪の跡、それらが雪と人を攪拌したような、妙な帰郷感を作りだしている。

肩のサックを背負い直し、私は足取りに戸惑いながら記憶の通りに歩を進めた。

あれから、一ヶ月以上が過ぎていた。

一ヶ月以上前からとっていた有休が今日からであった。

早朝に起きた私は、コーヒーを飲み荷物の確認をした。コルク色のストライプシャツを着て、コルク色のコーデュロイのズボンを履き、黒のコートを羽織り、黒革のサックを背負って、焦げ茶色のマフラーを巻き、黒のハンチングを被り、焦げ黒茶のブーツを履き、家を出た。

東京駅から新幹線で花巻まで向かい、花巻から普通電車に乗った。

計五時間後、電車のドア―横の赤いボタンを押すと開いた降車口から下りて私は着いた。遠野に。

駅前の雪だるまのある小さな広場から一直線にある商店街を進んだ。十分もすれば商店はすっかり姿を消し、古びた曲がり家や趣きのある屋敷が、少し土色の残る雪山を背景に構えていた。

五・六年前来たときと、変わらぬ肌をさすような寒さと、人というものに距離を置いてしまふような雄大な景色。以前来たときは、その感慨と人氣の無さに興奮してしまい、足跡のない急な真つ白な山段を焦るように登り上がり、ここはスサノオを奉つていたんだと膝から下が柔らかい雪に沈んだのにもおかまいなしで感心したのを覚えている。

民話の町。柳田國男が佐々木善治と出会い、遠野物語を作った町。町には語り部が今もどこかしらにいて、観光客にもその話を聞く場が用意されている。御土産屋には沢山の民話のかかれた本が置いてあり、最近まで行われていたという夜這いの記録まで昔語りとして販売されていた。

ここの人達は、方便のきつい人は何を言っているのか分からないが、町の雰囲気と同調するようなセピア色の穏やかさで、とても居心地のよい人達だ。以前来たときは、道に迷って近くをゆっくり歩いてたお婆さんに道を聞くと、丁寧にのんびりと随分アバウトに道を教えてくれた。とても楽しんだのを覚えている。

昔の自分の心境を思い浮かべているうちに、道は広い田んぼと広い川辺に挟まれた細い道路に変わった。

見晴らしよく、緩やかな道路が太い川と大きい山々の間を縫うようにその奥へと続いている。

まもなく左手の田んぼが消え、隙間のような砂利場が現れた。そこをちよつと覗くように奥を見ると、真つ白な山の麓があつたことに気付く、すぐ手前に細い山道と看板があることに気付く。

一本の、背丈よりも長い木の角棒に、三つの白い道標がそれぞれの方向を向いて雑にうちつけられている。傾いていて、雪と錆がついていて、とても観光地の案内看板には見えない。

近寄って、持っている知識と組み合わせると看板それぞれに「卵子酉神社」「五百羅漢像」「愛宕神社」みたいなこ

とが書いてあるなど読み取れた。

看板の進行方向と山道を照らし合わせるのにはやはり至難の技だ。私からすると道は二つしか見つかからない。

私は右手にある小さな鳥居に囲われた階段を登った。山中高くまで続く階段の一段々は、踏み場に困るほど狭く浅い。観光客が自分しかないのにもうなずける。

周囲の白さの中、幾つかの赤い鳥居を抜けながら伸びる勾配のきつい階段。長く次第に細く儀式のように高く続くの先。

私は登りながら、記憶を辿っていった。

階段の終わったあそこは、一面が膝上程もある雪景色。そこから正面を避け右手奥の方に進めば、山に潜むように建てられた小さな社がある。隅に行かず、正面に進んでいくと左手に覗くは溪谷のある山々。身近に見える獣道も山斜面もただ白い。寒気を覚えたほど日常遠い雪白の世界。白く昇華されたような、途端に心細くもなつた深い感慨。彼女はそこにいた。メイの母は気付いたら背後に立っていた。私と違い、雪側のひととして。ただつつましく。しかし整然と。

階段はもう終わりに近づいていた。私は最後の鳥居をくぐった。

また来るとは正直思わなかった。何で来たのだろう。頭が軽い二言を呟いた。

私はハンチングに片手を被せ、足場に気を付けながら足を運んだ。

山の腹壁と木々に囲まれた小道が、その一切を白く現れた。記憶越しに見た風景と違い、雪が少し浅く静かだった。人の気配が薄れ、徐々に自然へ忍び入ろうとしている感覚を得た。

私は足を積雪にさしこみ、その歯がゆい音を聞きながらその先を目指した。

景色は次第に開けていき、そして雪と山の世界が広がった。

私は進めるだけ進み、道崖の端に立った。白い山々が僅かな谷をおいて私を囲んでいた。正面では傾斜の急な山が私にすつきりとした真つ白な山腹を見せている。その少し左を注意深く見ると、百メートルぐらい先だろるか、雪に埋もれた地蔵ぐらいの大きさと黒く角の丸い長方形の石群が二十個ぐらい横二列で小雑把に並んでいるのが、小さく確認できる。

これは五百羅漢なのか。一面雪色の人消えた自然世界で、その一端にひっそりと不確かな存在を浮かばせている何らかの黒い作為物。その石群は以前と同じく私の背筋を冷やした。

どうしようもなく、怖かった。

以前はそれから戻ったか目の脇にある細く危うい崖に沿った獣道を進んだか、とにかく雪に腹まで埋まりながら一面白景色の中迷いながら進み、とりあえず五百羅漢像まで辿り着いた。でもそれは横に「五百羅漢像」と書いた看板があっただけで、像自体は雪で見えなかった。だが林の中に程よく人工的にあつたその場所は私を安心させたのだ。た。

そして現在、私は背後を振り返った。正面、右方、左方を統括する世界の一端。予想通りの風景に私の期待は冷たさに変わった。私の残してきた雪についた足跡が、私がこの世界に囲まれていることを意識させた。

雪の降らない日の照つたこの風景は、私の中にバランスを欠いた現実感を与え、不安がまたすこし内面を覆った。

私は、多分一見するといつもの何食わぬ表情で、その堅くなった口に一本啣えて火をつけた。

何回目に吐いた煙が、冷たさと共に風に吹かれ消えた。

そして顔痛く視界が白く覆われた。吹雪？

私は反射的に元来た道を振り返り走った。少しづつ溜め込んでいた恐怖感が一気に喉まで上がってきて、それを叫ぶ代わりに走った。突然の寒さと、背に追ってくるように当たる雪風が何だか私を焦らせ、黒い衝動を助長した。だ

が、阻む積雪達が私を這うような速度に留めた。消されるような恐怖が私の体を強く動かした。前に出す上半身の動きに埋もれた下半身がついていけず、私は前方の積雪に倒れのめりこんだ。

冷たい。私はまた立ち上がって恐怖を背に這い逃げることに恐怖と、そんな自分の阿呆らしさに、ただ腕を枕にして雪に埋もれた状態で動かなくなった。

少しずつ、衣服を透して雪が冷たく溶けて体に凍みこんで行った。枕にした腕や膝とふくらはぎの内側が冷えて痛くなってきた。きつと赤くなつてしまつたかな。だんだん意識が暗い底に向かつて行き、私の全身が白く光る雪に覆われ、その存在を委ねているのがみえる。

なんて落ち着くんだ。

脳の奥まで凍み込まれてしまいたい。

ぼんやり、と白い女性が意識の暗がりから浮かび上がった。君はどこにいるんだ。私は記憶に聞いた。すう、と彼女が消えた。

メイ、どこにいる。

地面の感触が答えた気がする。メイはこの雪の深い奥にいる。

「おかえりなさいませ」玄関に上がりスリッパに履き替えたところで、主人がパタパタと私を出迎え、眉をしかめた。

「ちよつと、全身に雪がついてますよ。どうなさつたんです」

「ああ、ごめんなさい。外で払つたつもりだったんですが……」私は力なく答えた。

「そんなのはいいですから。ちよつと上がつて下さい。ただいま拭く物をお持ちします」私が何かを答える間もなく、店主は奥へと忙しく戻つていった。

私は靴下を脱ぎ、上着やらハンチングやらも一緒に玄関に丸めて置き、スリッパを履いて上がった。体から湯気を立て、風呂から上がると二階の部屋にはストーブが既に点いており、浴衣だけで充分に過ごせるほど温まっていた。

無理を言つて二階の隅の部屋に換えてもらったのに。

私はストーブに小さくお辞儀し、近くの座布団にあぐらをかいた。

風呂上りの一服をいただいているところに、襖から声がした。

「どうぞ」

「失礼致します」店主がお盆を持って現れた。「お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます」私は備えつきの湯呑みをちやぶ台に置き、いい匂いのする一番茶をいただいた。「これは、美味しい…」私の様子を見て、満足気に店主が微笑んだ。

「そう言つて頂けたらありがたいです」

「色々とすいません」

「いえ、丁度良かったんです。折角買ったのはいいんですが……この時期、お客様は滅多に来ませんから。明日珍しく来るお客様も高校生ですし……」

「へえ。高校生が。しかもこんなところにね……」あ、と私は失言を訂正した。

すると主人はいえいえと手を振り、「地元の高校生ですから」と何かを含むような小さな声で言った。

「え」私は首を傾げた。

「この辺には若い人が二人つきりになれる場所なんてありませんから」

「……成程」

「五百羅漢像はいかがでしたか」

「ああ、近くまでは行ったんですが。結局めげてしまいました」

「そうですか。背筋に来る寒さもありませんでしたか？」

「ああ。そういえばあったような気がします」

「娯捨て処もそうですが、寒気のような何かを感じる方は結構います。かく言う私もそうでして、モーがいるんじゃないかと怖がったりします」

「・・・モー、つてなんですか」

「お化けのことです」

へえ・・・、そう呟く私の顔を見て店主は「お化けにでもお会いになりましたか」と聞いた。

私は手を振り「いえ、ちょっと怖がりなもので」と言った。

「私は小さい頃、見ましてね・・・筋金入りです」店主の答えた様子に、私はハハハ・・・と、主人はフフフ・・・と二人乾いた声で笑った。

「では、ごゆっくり」主人はお辞儀すると、部屋から下がった。

「あ、部屋を変えてもらって、ありがとうございます」

「いえ、たまには人を通さないと・・・出ますから」モーが・・・。襖を閉じながら最後に主人がそう言った。

・・・客が少ないのには理由があるんじゃないか。

私は明日の高校生を少し心配しながら、まだ温かいお茶を飲んだ。

一通り、のんびりを楽しんだところで私は時計を見た。八時。夕ご飯も食べたし、そろそろ私は立ち上がった。

ストープを切り、私は大きめのカーディガンを羽織った。そして先程買ってきたミネラルウォーターのペットボト

ルを取り出した。少し考えてからちやぶ台を部屋の中央にずらし、その上に蓋を取ったペットボトルを置いた。後は……と考えていると、先程の寒さまでもが思いだされた。

引き起こされた私は目の前の雪面を見つめていた。今まで自分がのめり込んでいたところを。

そして先程肩に当たった硬い感触。一瞬で心が冷やされた。寒さを悪くないと捉えていた私が、寒さを嘗めていたと思い知らされた瞬間だった。本当の冷たさ。それは生命を凍らす。

私は後ろを振り向かなかつた。もう肩に何かの感触を感じることはなかつたが、首筋に零度の気配を強く感じていた。

外の風と直に繋がることのできる、例えば窓のある、二人きりになれる処。外と同じ寒さを保ち、澄んだ水気を満たして、灯りはろうそく一本ほどに。用意ができましたら窓を開けておいて下さるよう。月の当たる場所からは入れません。そこでお会い致しましょう。

部屋の電気をオレンジ灯に留め、私は窓を開けた。そして風の音が下に響かないようカーテンをまとめた。すぐに部屋は寒さに覆われ、暗がりの中、私はストーブを恋しく思った。

夜の十時。

彼女はまた来ない。そう早くは来ないだろうと思つてはいたが、部屋が大分冷えてしまった。

私は布団に潜りこんでいた。仰向けに、寝る時と同じ格好で薄暗い天井の木目を見つめていた。

それで眠入ってしまうことはないだろうと思つたし、なにより考えること、思うことの暗に浸りたかつた。部屋の隅に眼を向けられない限り、明かりが点いているとは気付かない。点けて置いたオレンジ灯は先ほど消してしまい、代わりに部屋の隅にあった灯籠のような四角い小さな明かりがぼくと部屋の闇に奥行きを与えているだけだった。

胸の動悸が少し速い。

天井の深い闇に浮かぶのは、メイの母の姿。

儂げなその白い影。拡がり散って私の体に溶け込んでくるような優しい白い彼女の感触。

「雪女みたいだ、って言われました」五年前、何時の間にか私の傍らで体育座りをしていた彼女はふとそう言った。布団にうつ伏せていた私は顔を上げ「なるほど。遠野らしい」と答えた。

「似ていますか？」まるで雪女を知らないような口調で彼女が聞いた。浴衣の合間から覗く足は闇の黒さえも従えるような白んだ色をしていた。

私は布団から抜け出し胡坐をかいて「うん。その表現は悪くない。だけど、随分と冷徹さに欠ける雪女だなあ」と少し笑った。

「ちよつと違いますか」

「うん。ちよつと明るいかな」

「窓の雪みたいですか」

「窓の雪？」

「ご存じないですか？ 蛍の光」

そう言つて、彼女はメロディーを何気なく口ずさんだ。

蛍の光、窓の雪。苦学生が夜勉強するとき、油を買うこともできず、蛍や窓の雪の小さな明かりを代わりにしたとか、そんな唄だ。そう思い当たつたが、私は彼女が口を閉じるまで静かに耳を傾けていた。

「ああ、知つてる。なるほど、ぴったりかもしれない。雪女よりも雪灯りの方があつてるよ」

「雪灯り。・・・そうですね。小さな雪ならあなたを凍えさせない。そしてあなたの近くを灯すこともできるのですね。とても嬉しいです」彼女が首を少しかしげて笑つた。

本当に、冷徹さにかける雪女だ。そう思いながら彼女の白い笑顔から目を離せなかったのを覚えている。

だが、私は彼女と身を寄せ合っているとき、何か大きなものに立ち向かっているような、生を堪能するスリルのような感情も感じていた。実際、葛藤のような言葉もしぐさも見ることはなかった。

抗えば、きつと白くかき消されてしまうのだからなあ。どこかで私はそう納得していたのも事実だ。

世俗と確かな距離を持つ、病的なまで冷たく儂く白い彼女の存在は逃避と生の喜びを与える完璧な安心感を私に与えていた。

だがそれは一夜の話だ。

長く一緒にいたら、どうなっていただろう。見当もつかなかった。

焦点が天井の木目に戻った。そしてこの暗い空間に一陣の風が吹いた。

やけに耳に響いたその風は人の気配を伴っていた。

私が半身を起こすと、ちゃぶ台の横でこちらに向かつて正座する女性の姿が、闇に縁取られて見とめることができ
た。

「メイを預かっていただいて、ありがとうございました」

頭を下げたその影の声。五年前の衝動が、私の胸に沸きあがった。

私は姿勢をそのままで抑え込むように「久しぶり」一言そう言った。

「ご無沙汰していました」丁寧な彼女がお辞儀を返した。

次第に彼女の細かい部分が目に見えてくる。どちらかと言えば、面長の顔。下げた頭に見えた髪飾りでまとめた、背中で広がる黒い髪。紺に鼠色の細縦縞が入った着物を着ている。そして、乾いたような黒い眼。闇に覆われた白い肌は記憶と違わず白かった。

「時間は、あるのか」先に口を開いたのは私だった。

行儀良く膝に揃えた両手の指は動くことなく、暗い目線がその先を見下ろしていた。

「あまり」

「そうか」ごめんなさい。と彼女が呟いた。

「ちゃぶ台の向かいに行ってもいいかな」布団の上に正座しているのはどうも格好が落ち着かなかった。

「はい、勿論」俯いた彼女の口が少し緩んだのが見えたような気がする。私が音を立てないよう移動している内に、彼女は近くにあった座布団に手を伸ばし、私の座る位置に敷いてくれた。そして窓を八割方閉め、カーテンを閉め切った。

私は彼女に座布団を渡し、「色々と話し込みたいが、聞きたいことから聞かせてもらいたいんだ」と言った。一間置いて、彼女が頷いたのを確認してから、私は口を開いた。

「メイは」暗の籠った部屋に私の声は乾いて響いた。自分の声が沈まない内に私は言葉を続けた。「メイは、どうなってますったんだ」

言葉にする負担を全て彼女に委ねた自分が情けなかつた。彼女は動かかなかつた。私は動かずに待った。

彼女が右手を目の前の床に伸ばし、手のひらをつけることはなく細い指を揃えて床に突き、身を僅かに私に傾けた。「あなたの目の前で、メイは消えたのではないのですか？」

彼女の乾いた目が傾いた眉と近づいた。微かな、違和感を感じながら私は答えた。

「ああ、消えた。目の前で……消えてしまった……。だが、あまりに、あつけなく、一瞬で消えてしまった。だから、いまだに確信がない。正直、信じたくもない」私は心境をそのまま言い終わると視線を床に落とした。彼女は何かを考えるように口を閉じた。

「……人が死ぬってというのはそういうものではないのですか」

違和感を胸の奥に見つけた。針先ぐらいの、黒い染み。

「じゃあ……」やつぱり、という言葉を飲み込んだ。

黒く、とても黒いシミ。それが大きく広がっていく。穴になってしまふ。

胸の酷い圧迫感を抑え込む私は彼女の様子を見て言った。「平気……なのか。君は」

彼女の顔から緩みが消え、冷めた表情が返ってきた。「平気ということは、ないです。でも、仕様のないことではないですか」

しまった、と思った。「すまない。辛いのは君も同じだよな。無神経だった」私は他が見えていなかった。だが、彼女の表情にメイに対する未練を読み取ることはできなかった。

そして、私は何を期待していたんだ。死んで、しまったものはどうすることもできない。

私が何でも何とかなると思っっているのは、生きているから。そしてそれは自分に関してのことだけだった。

「私は、てつきり……」彼女がそう呟いた。私が顔を上げると彼女は背を丸め、私に細めた視線を向けていた。「てつきり……なんだ？」

「いえ、なんでも……」そう言った彼女と私の間に何か距離を感じた。それが何であるかは、彼女によって肯定された事実が一杯な私には、確信することができなかった。

「でも、メイの……体がない」

彼女の乾いた目が私を見た。薄い口元が、糸で締めたようにほんの僅かだが力を込めた。

「メイの、手や腕や足と同じです。消えて、もう形を成さない」

彼女の言葉を、心で転がす私の表情を見つめ、彼女の口が小さく開くのを私は酷く遅い速さで見っていた。

「少し、話しをしてもいいでしょうか。きつとあなたが落ち着くための一柱となりましょう」私は、抗うことなく頷いた。彼女の眉が、困ったように傾いていた。私の顔が、きつと困ったような顔になっていたからだろうか。

「私は……ここ、遠野の山奥よりも夜と霧に近い、白く寒い滴が辺り一面に満ちたところから参りました。私たちは電車を使うことも無く、何を買うことも泣くことも無くただ漂い、重なったり、水を含んで、口を薄くすばみ、辺り一面に吹き満たしています。そこは、雲に覆われたような雪と霰と霧の世界。私達にとつて、外は何やら硬く赤い空気が。もし踏み入れば体を分けられ、薄く一杯に広がり、そのまま白い煙のように、景色が馴染んでいき、消えてしまう。そんな感覚でした。あるとき私のいるところの雲の切れ端のような、ある薄い一端から、あるものを見ました。私たちと同じ、他と混じることとはなく漂うような薄綿のような人影。でもそれは一端を重ねることも容易くさせない、凍らせたような薄綿でした。赤くなく硬くもない人が外にいる、その事実には生まれて初めて興味というものを持ちました。袖を引かれるように、私は少しずつ、こっそりと外に体を慣らしていききました。興味を得たそれに習い、体を硬くに冷やしました。今日は足を、今日は手を、少しずつ姿を整えそして、あなたに会いました」彼女と目が合った。初めて合わせた時とは違う、時間の積み重ねがあった。

「そしてメイが生まれました。そして、私は元の場所に帰りたくなりました。外は、所詮私にとつて外だったのです。ですが、メイにとつて私の住んでいたところは、酷だと思いました。とりあえず試しも込め、メイをあなたのところに送らせていただきました」

「話は終わりです」彼女はそう言つて私を見た。

「少しは、落ち着くことができたでしょうか」

私は笑つたが、顔にあまり力が入らなかつた。どうやら、私のショックを和らげようと、私の知らない彼女とメイの物語を話してくれたようだ。「ありがとう」つまり、メイは消えている、ということだ。

「あれから、幾つかの人を見て」彼女は編まれた藁を数えるように、床畳に顔をうつむけ言った。

「人によつて様子が違ふと思ひました。でもあなたほど近づける人はいませんでした。熱さなど微塵も無く、正直人に触れているのか分からなくなる時もありました。あなたが外で、何故他の人と変わりなく過ごしているのが分かりますでした。でも、私とは違ふというのも確信していました。そして私は、あなた以外の人が外に出す火の中に置く火を、全て内に、奥で揺らがせているのではないかと、思い当たりました」

彼女が何を伝えるわけでもなく私を見た。

「もしそうなら、あなたの凍つた綿にくるまれた炎はあなたを溶かさないのでですか。それとも何かを生み出すのでしょうか」

私は何となしにその目を見返した。

「分からない。ただ、私は私のやりたいようにしている。君と同じように」

「・・・何のために私のところまで来たのですか」

「メイと再会するためだ」

「メイは消えてしまったのですよ」

「何かをしたかった。メイと約束したんだ」

「死んだ者に約束は関係ありません。その時、そう通じてくれたのならメイは幸せだったでしょう。あなたにはそんなこと、分かっているのではないですか」

「ああ」

「じゃあ、他の人がするように自分を説得すればいいではないですか」

「すまない。自分の心が納得できないんだ」

「何故です」

「笑わせたかったんだ。瞬間にじゃない。一面真っ白な安心した心持ちの中で、メイに、楽しいなって、子供らしく笑って欲しかったんだ」

「血を分けていても心は別。あなたが青い雪を見て目を潤わせても、私の目には濁りを生むかもしれないように。メイが生を望んでいたかも、分からない。本当は早く硬い熱の渦から逃れたかったのかもかもしれません。心という世界は、生まれながらの風景も勿論、そこに積もる色も、全く同じは在り得ません。だから結局自分を生かしていくしかありません。だから、それぞれが、干渉を与えないように、好きなように漂って、気の合った時は重ね混ざり合い、幸運とばかりにそんな気持ち面白く味わえたいのですよ。その静けさは、誰も傷つくこともなく、悔いにもならない、秩序があります。あなたはそうやってきたはず。少なくともメイはもう身を溶かす苦しみを受けることはありません。それをよしとすべき、それが堅実ではないでしょうか」

「確かに、一つの秩序かもしれない。私の世界には必要かなとも思う。だが、白い雪を見たとして、私が寒さを、君が故郷を想った時、私達はその違いについて一緒に考えることができる。そして人というものに奇妙さを感じ人生の困難さを知ってから、自分たち二人の繋がりに一緒に微笑むこともできるんだ。そのための手段を私達は持っている。メイは私に伝えた。私と生きたいと。言葉で、手のぬくもりで、涙で。私を包もうともしてくれた。小さな頭を動かし、四肢を溶かし、心も熱して、生きた。それであんな最後は、認めない。私が許さない。可能性が砂粒ほどでもある限り。私には、傷つき傷つけたことよって得た知恵がある」

「可能性が、あるんですか？」

一呼吸した。

「君はさつき、私の外の火の分が内に纏めて火となっているのでは、と言ったと思う。でも私の内にそんなものを

見たわけではないだろうか？君の予想だ。外火＋内火＝普通の人の持つ総熱量。君が使ったこの概念。これはある点に無いものはその分別の点に在る、という基本概念が前提だ。君はその概念を持つている。人が死ねば遺体が残る。燃えたのなら灰が残る。メイの体は消えた。ではそれはどこへ？」

「思えば、メイの手や足が消えた頃から疑問はあった。消えた質量の分はどこへ行ったのか。溶けたとしても、水滴のようなものはなかった。作り物のような、石膏のような泡白い断面。そしてメイが消えた最後の夜。メイを包んだ一面の霧。突然現れ、勢い良く、突然消えた。霧というのは水蒸気が凝結し、微小な水滴となって空中に浮遊するもの。強い風が吹けば、霧は散ってしまう。だから顔に当たるような勢いで霧がやってきたなんてことは在り得ない。だから感覚的には、細かい雨。霧雨と言うのが正しい表現だった。だが、霧雨とは雨の字の通り天から降ってくるものだ、下から上に襲ってくるなんて絶対に在り得ない。そして君の故郷を表した霧。これは規模の広い霧のことだ」私は浅く一呼吸した。

「ひよっとしたら、メイは君の故郷にいるのではないか」

彼女は黙って私を眺めていた。そして目を瞑った。

「私も、知恵というものを学びました。ですが所詮、嗜んだ程度。学ぶ楽しさを知った子供だったのですね」そして彼女が薄く息を吹いた。メイの好きだった、アンフィが息を吹き込むシーンが一瞬、遠く浮かんだ。

「正直に言えば、分かりません」彼女が答えた。

「何故なら私はそこに帰ることができないからです。私がつけてしまった好奇心は干渉への欲求に繋がり、故郷の秩序に反するのです。あなたと知り合い、世間に僅かでも身を染めた私がそこに戻るには、心を冷やし静める必要があるのです。それはできたとしても、長い時間を要するでしょう。そして、メイは、私とあなたの子。いわば私の世界とあなたの世界の境界。だからこそ、人多きあなたの土地でも、耐えることができた。もし私が行ったのなら、す

ぐ殺されるか殺すしかないでしょう。でもその分、あの子が私の故郷に行けるかもわからない。ですが、体の無い今、戻ってくるとしたら、確かに私のいる私の故郷しかないでしょう」

「……私が行くことはできないのか」

「あの子を笑わせたい。その考えをまず捨てなければなりません。そして、もしメイがいたとしても、きつとあなたの知るメイではないでしょう。私達は好きなように生きますが、ただ漂い触れば寄り添い、雪雫を食んで、ただ雲の靄のように生きる世界。好奇心も知恵も邪魔です。夢を見ているようであつても夢を思うことは、まずありません」

秩序の世界。真つ暗になつた脳裏がそう呟いた。

彼女は不要と思つていながらも、私を納得させるために説明をしてくれたのだろう。窓の外に顔を向ける彼女の様子が、この人も帰るところがないのかもしれない、と私を少し虚しくさせた。窓にはカーテンが閉まつていた。

「メイを……その世界に、戻してやつてくれ……」話し終わった彼女に対し、私は力の抜けた口からその言葉を搾り出すことしかできなかつた。全ての力はこぶしを握る力になつていた。

彼女がこちらを向いた。「そうしたいと思つています」

「すまない」

「最後に、私の好奇心を消してください」

私は彼女に目を向けた。

「あなたの奥には大きな炎があるのですか」

私は力なく微笑んだ。

「メイはそう言つていた。ピンク色らしいよ。私の夢が燃えているんだ」

「そうですね」薄く、彼女は微笑んだ。

私もつられて、自嘲ではなく薄く微笑んだ。

最後といっても、その好奇心は初め会った時とは違い小さく丸められたように、隅に置いておくようなものであるだろう。ちゃぶ台を挟んで向かい合う私たちの間の、硬さのない空気が私と彼女の最後の共有なのだと思う。私は軽く目を閉じた。私達の間初めてメイがいるのを感じた。

彼女が立ち上がる布の音がした。目を開けるより早く、首に冷たい感触を感じた。

「私は、今日こうしたかった」後ろからそつと、腕を肩の上から通し抱きしめられた。首筋、背中から懐かしい寒さが染み込んでいった。私は胸にだらりと乗った彼女の手にしばらく触れた。そして力を抜き、彼女に身を任せた。そして彼女は離れ、立ち上がった。

「行くのか」

「はい」

「独りで、大丈夫か」

「そうやって私は郷に帰るのです。でもそう言われるとほんの少し、後ろ髪を引かれます」

私は困ったような微笑をし、立ち上がった。「そう言えば、君の名前は」

彼女が振り向いた。「名はありません。必要なかったので、こちらでの名前は、ユキアカリ。それで充分です」

「そういうものか」

「そういえば、メイの名の由来ですが」

「由来が、あるのか」

「はい。あなたと私が初めてあったとき、憶えていますか？私が、何をしているんですか、と聞いたらあなたはしばらく考えてから、一応、メイシ神社なんかを見ようかな、と言いましたよね」

私は思い当たった。本当は大して目的なんかなかったが、背後に突然現れた雪の中の着物の女性。私は思考を奪われていて、階段の途中で見た看板に解説の載っていた神社の名前をあげたのだった。正しくは、愛宕（あたご）神社。読み間違いだった。

「火消しの神。ぴったりだと思いませんか」

遠い記憶に口をあけている私に微笑み、そう浅くお辞儀をした。

襖の開く音がして、あ、と私も部屋を出た。

下りる階段に彼女の姿を見つけることはできなかった。

疲れが溜まっていたのだろう。

ようやく、突然の来訪者との生活にもある種のペースというものが見えてきた頃だった。

きつと気が緩んだ途端、それまで余り意識していなかった体のだるさや額の熱さが一気に目を覚まし、私を覆ってしまったのだ。

「お邪魔しまーす」

何時の間にか寝入ってしまったことに気づいたのは、耳にした聞きなれない声に体を起こしてからだった。

私は眉間に皺を寄せ、喫茶タナカのお店がやはり部屋にいるなあと考えた。そしてとりあえず挨拶をした。「どうも」「あ、今日は」ビニール袋を手を提げた彼女も頭を下げた。

「メイちゃんが店まで来たんですよ。おっとうが、風邪引いたって」キッチンに向かい鍋をコトコトいわせながら彼女は言った。「丁度バイトも終わる頃だったので」セーラー服の女子高生が自分の部屋で料理を作っている図、それは酷く不自然に思えた。

彼女の父親が知ったら私はどうなってしまうのだろうか。

「すまないな」私は布団から起き上がり冷蔵庫から麦茶を出し、一杯飲んで一杯をテーブルの上に置いた。

「あ、お構いなく。ていうか寝て下さいよ」

「まあ一応ね…そういうええはメイを知らないか？」キッチン窓から見ると外はもう暗くなっていた。

「あ、そういうええ。なんかワタシをここまで引つ張ってきたらどっかに行っちゃいましたよ」

この子ものん気だな。そう思いながら、最近の若いのは…なんて考えるのは年をとった証拠だろうか。

「それより、ワタシが頼まれたんですから寝てくださいよ。ほらほらほら」

「あ、ああ」体の思うように動かない私はされるがままに布団に押し戻された。

横になると自分が風邪を引いていることがよく分かった。頭も鼻も、体中が熱く、けだるかった。

「ありがとう…」くぐもった声で私はその声を出した。

「いえいえ」とか、「おかげだけ作っておきますね」とか色々聞いたような気がするが私の意識は煮えるような暗

闇に沈んでいき、今度お礼をしなくてはな、などと思っている内に聞こえる声の全てはおぼろげにすぐ消えていった。

どれぐらい、寝ていたのだろうか。

まどろむ浅い闇から両目をうつすらと開いた。沼のような意識が、近くで発せられている

沼に合わぬ何かがあると知らせた。

顔を向けると、すぐ傍らに両目を瞑るメイの横顔があった。私の布団に片手を置き、小さく何かのメロディを口ず

さんでいた。大人びたように静かなメイの横顔を私は夢の続きのように眺め、少しの間また目を閉じた。

このこはよいこだ。ねんねしな。おちゆきかぞえてねんねしな。かぞえりゃわたこ。ふめばきえる、くらいゆき。

うえはあはいえ、このこをこもれ。このこのかわいさ、ともし、ゆらいでとけるゆき。ゆきつぶおちや。このこをつ

つめ。もつとつもれや。こーんこん。

「…メイ」

糸が切れたように、勢いよくメイが振り向いた。

「おつとう！起きたの？」

「ああ、すまなかつたな」神妙な面持ちのメイに私は半身をあげながらそう言った。するとメイは台所に向かって走っていつてしまった。

裾踏むなよ、私は声にならない心配を口から出した。そして声をかけた途端に離れていったメイを少し名残惜しく感じ布団の上に胡坐をかいた。

「あの店員さん、来てたのか」メイはなにやらごそごそとキッチンと冷蔵庫を歩き来していた。

「うん。モンゲンとかでさつき帰ったよ。ご飯作ってくれてた」

メイはそう答えるとお盆を持つて戻ってきた。

「はい。食べて」

目の前に、湯気を立てるお粥とコップに入れられた水が出された。

メイが私の膝にお盆を載せると、そうと正座し傍らで私の様子を見守った。

「ありがとう」てきぱきとしたメイの一連の様子に感謝し、「メイの分はないのか」と聞いた。「一緒に食べよう」

「うん！」そう言つて私とメイはそれぞれにお椀を持ち、一緒に熱がりながら二人でお粥を食べた。

お粥が体の節々のだるさを温め、良く冷えた水が熱痛い体の内に染みこんだ。

「ん、この水…」

「買ってきたの。おつかあがミネラルウォーターは体にいい、つて言つてたから」

おいしい？メイがそう聞いた。

「ああ、生き返るよ。ありがとう」

私がそう微笑むと、メイはまるで何かを成し遂げたかのように笑い返してくれたのだった。

大きなクシヤミが破裂音のように耳を叩いた。

「大丈夫？」連れと思われる女性の声が近くの座席から聞こえた。

「畜生。明後日から後期試験だつてのに」先ほどから何度もくしやみをしていた男が鼻をすすった。

若いカップルが随分前から近くに座っている。くしやみから連想された回想はくしやみによつて締めくくられた。

私は肘をついて窓から外を眺めた。だが、彼らの声がやたら甲高いためか会話がしっかりと耳に入ってくる。「だから冬に東北に行くなんて反対したのに」

「スキーもしないし。観光なら東京に行きたかったな」女性が退屈を思いだすように溜息をついた。

「うっせえな。じゃあ最初に言えつて。今更言うなよ」頭わりいな…男がなじるように大声で呟いた。

「なによ、言ったでしょ！せつかく心配してんのに」

私は車両を出て、連結部の乗降ドアに寄りかかった。そしてドアの窓から、走る外の景色をただ遅れてしまつような意識で見つめていた。

やっぱり、どなり合うのは性に合わないな。

なあ、メイ。

自然にメイに語りかけたことで、私には先ほどの回想の余韻が残っていると分かり苦笑した。

「じゃあ、なぜ行かなかった」私のややこしい部分がすぐに返してきた。

その問いを気にせず、私は視線を外に戻した。そして次第に近代化していく風景の様子を少し切なく眺めた。私の奥に、ピンク色の炎がね…。

私の胸の奥で揺らぐピンク色の炎を、頭に浮かべた。

そんなに綺麗なもんじゃないよ。

すると白い女の言葉が次に過ぎった。

：確かに。私は真綿のようかもしれない。

他人の主張を真つ向から否定することはまずない。

自分が話しをしなくていいように、その人の口が止まらないような受け答えもできる。

怒ることもない、そのときは去るだけだ。

「冷たいんだもの」

優しいんだね、そう近づいてきた女性は全員がそんなような事を言つて、黙るかどこかの男と寝て去つて行つた。

私はそれを責めることはしなかった。

冷えた真綿。その通りだ。

わたしのところに来てくれないの？

私の中のメイがそう聞いた。

私は列車の行きつく先を想つた。

明日からはまた毎日が始まる。昼働いて、夜休む。その繰り返し。

いつまでもそれを続ける気はないが、永遠の繰り返しにも思える。ユキアカリのいたその世界に憧れの眼を向ける瞬間も確かにあつた。これからも、きっと迷うだろう。

でもね、メイ。

私は生まれてからお前の年ぐらいいまでこの世に立つ術を身に染みこませた。

お前ぐらいいの年からはこの世の成り立ちしくみを、常識と学んだ。

それから今まで、この世で生き、身に付けた知恵を駆使したり、またはその延長を勉強してきた、カルキの水を飲み、ビルの隙間を歩き、生命を進ませてきたんだ。

諦めでも妥協でもなく、私はその足跡の中から頑張りたいことがたくさん生まれたんだ。

その想いを投げてしまうと、私は抜けがらになってしまふ。そうしたら、今までの人生に押しつぶされてしまふんだ。私はそれを弱さとは思っていない。心の重しを捨てることは私にとっては強さにならない。

私はそつちの世界のルールを知らない。その想いを持って行くことが叶うか分からない限り、慎重に行きたいと思うんだ。だから……。

・・・私は鼻で笑った。

言い訳など、それを覆す結果を出さねば、何の意味も成さないのだ。

私は身を立ち上がらせ、車両に戻った。

私は、やれる余地がある限りそこに進むだけだ。

周囲の落ち着いた座席に戻り、煙草に火をつけた。

窓からの景色にもう雪を見ることはできなくなっていた。

ただ見慣れた風景が混じっていき、煙草の煙が窓にあたる。

遠野が離れていく。

走る景色に私は離しがたい風景たちを浮かべた。

雪解け跡。一面の雪。その中を朱色の鳥居に囲まれ上がっていく石階段。

その先に五年前と昨晩を思いだした。真つ白な、ユキアカリ。

ありがとう。無事で。

私は彼女に別れを告げた。

そして三ヶ月前を思いだした。手紙、隅の暗闇に小さく行儀良くたたずんでいたメイ。

ついこの間のような日々を思いだした。小さい体を精一杯の思いやりで忙しく動かしていたメイ。うつむき、見開き、はしゃぎ、慎むような笑顔。

まぶたを閉じれば浮かぶ、夢のような夜のあの瞬間。涼しく小さな息。額に触れた唇。私の体をすり抜けた、メイのぬくもり。

おっとうともっと一緒にいたかったよ。

頬をつたう暖かな感触があった。

歪んでいく視界の中、拭った指についた水滴に目を奪われた。

私は、泣いているのか。

・・・まさか。

眉間の熱くなる感触に戸惑い、私は顔を伏せた。

まるで言うことを聞かない衝動に、私は口を閉じて呻き声をこもらせた。

くそ。止まれ。

そう何度念じても嗚咽が、弱みが口と鼻から漏れた。

これから、私は家に帰る。また闘わなくてはならないんだ。…だから、止まれ。

家？

まずい。そう思った。だが私の頭ははつきりと連想した。

頭に浮かぶ家。そこには、在った。

メイの食器が。アンフィのビデオが、ステッキが。メイの日傘が。メイの沢山の断片が、暗がりですれを待っていた。涙の固まりがまた一波、両目から溢れた。

私はただ涙を流し、その勢いに乗せるようにメイの名を頭で唱え続けた。

……生命とはなんて、あっけなすぎる。

息を切るように乾いた嗚咽を一度吐いた。そして鼻と口から強く長く息を吸い、両目に力を入れて私は顔を上げた。そして震える手で消えかけていた煙草に再度火を点け、強く吸い込んだ。

むせる喉で大きく咳をし、窓の外を睨んだ。

私は…私のやり方で近づいてやる。

遠くなるメイ。だが…。

私は滲む目で左手を見た。そして右手で額に触れた。

あの日繋いだ手の感触、メイの生命のぬくもりはこの手とこの額に確かにある。

私は目を拭った。だから私は霧すらも信じる。約束など、忘れるわけもない。

窓越しに過ぎる風景、閑散とした街の向こう、寒い緑の先、山々の奥を見た。

長い夜のように、瞬間のような輝きを持った日々が、その遥か遠い白き霧の中にある。

一つの生活に、一人の愛する娘に私はとりあえずと一言別れを告げた。

東京はまもなくだった。

エピソード

エントランスから見下ろす景色は一面の森だった。緩やかな山中の小高い丘に立つこの小さな洋館は広い地面から生えてきたように肅然と、灰色の空に愛され、砂色の大地に育まれ建っていた。

「健一兄さん。準備ができたよ」ガラス戸が開き、恵子が私を呼んだ。

「うん。今行く」濃広な緑を臉に残し、私は恵子に従って中に入った。

「お医者さんはなんて？」年季の入った廊下を進みながら私は恵子に聞いた。

「うん、もう…そろそろ意識がなくなってもおかしくはないって」そう言っただけで恵子は俯いた。

「そっか…。やつぱり、もっと早く来るべきだった」

「ううん。健一兄さんはお仕事だったんでしよう？まだ一年目なんだから、しょうがないよ。お父さんもきつと、
そう言うわ」

「…うん。そうだね」

突き当たったドアを恵子がノックした。一呼吸すると、どうぞ、と聞きなれた女性の声がした。

「失礼します」私と恵子の中に入った。八畳ほどの古びた部屋の左側に大きく地味なベッドがあり、そこで父さんは寝ていた。傍らには白衣を着た初老の医師と母さん、母さんの裾を掴んでいるのはまだ幼い優一。ベッドと少し距離を置いて見守るように目を向けているのはスーツを着た太郎だった。お父さん以外の全員がこちらを振り向き、太郎が口を開いた。「健一、久しぶり」

「久しぶり」実は挨拶代わりに手をあげていた父さんに私は手を軽くあげて答え、ベッドに向かった。医者に頭を下げると、優一の頭に手を置いて母さんに声をかけた。「ご無沙汰です。お母さん」

「よく来てくれたね」母さんは柔らかく微笑んだ。

「健一、のんびりやっているか」父さんが顔をこちらに向け、悪戯そうな表情で言った。

少し頬に陰が差しているが、その穏やかであるうとする目に衰えはなかった。「うん、ときばきと論理的にやつているよ」私は不敵な笑みを返した。父さんは相変わらずの様子だった。

父さんは顔を戻し目を閉じると「じゃあ、ちよつと悪いがときばきと旨い水を一杯、持ってきてくれ」と力無く言った。

「せっかく来てくれたばかりなのに、人使いが悪いんだから」母さんはそれでも少し笑っていた。

「相変わらずだなあ。じゃあ、のんびりと行ってくるよ」手をあげて答えた父さんに視線を送り、私は部屋から出た。都会では考えられない長い廊下を歩き、下の階へと向かった。昔と変わらぬ家と皆の様子、それが形作る空気が、そ

して以前と同じ調子で交わす父さんとの受け答えは、正直都会で疲れていた私を随分とリラククスさせてくれた。でも、係りつけの医者が言うのだから、もう長くはないのだろう。

父さんを惜しむ感情が私の記憶を辿った。四人の子供達の中で、私は一番の年上だ。そして優一を除く私達三人は本当の子供ではない。それを父と母が聞けば怒ってしまうだろうが、本当のことだ。私が連れてこられたのは、確か七歳の時。それまで狭苦しい都会の家々をたらい回しにされていた私にとって、ひっそりとたたずむ洋館は夢でも見ているようで、館内に入ると構えていた無音の空間に私は戸惑ったものだった。潜んで口を開ける真つ暗な怪物のようだった。でもその怪物は私を飲みこむ気はないように見え、奇妙な安堵と興奮を感じていたのを憶えている。

「君は今日から執事だ」

そうして私は昼まで学校に行き、午後は館の掃除などをして小学校時代を過ごした。でも授業参観には必ず来てくれたし、週末にはどこか映画や食事や散歩に連れていってもらえたし、友達を連れてきたときには家全体で盛り上げてくれたものだった。

中学生の時には夕方一時間ほど父さんから個人教授を受けた。といっても、例えば好きな漫画について、「何でこの主人公が好きなんだ？」などと質問されて私がついて熱弁するような軽さだった。

高校になると小一時間、合気道を習った。時には地元の実芸者のお爺さんが教えてくれることもあり、その時は父さんも習う側になっていた。その頃から、私は自ら好んで父の教えを受けていた。父さんは私達を甘やかしはしなかったが、決して声を荒げたり、ましてや拳を振り上げたりしなかった。撫で回されたり頬をつねってからかわれたりしましたが……。

戦地のテレビ中継で子供の泣き声を聞いて拳を強く握っていたり、たまに地下のサンドバッグを叩く音が聞こえてきたぐらいだった。

「感情をそのままにぶつける権利は子供にある。大人には切り替える知恵と切り捨てる知識がある」私が大学生のとき、聞いた質問に対する父さんの言葉だ。

もう一つ、印象的な言葉がある。

「私には、娘がいる」成人式を迎え、父と二人で飲みに行ったときの言葉だ。

そのことは母さんも知っているが、母さんの娘ではないらしい。高校生の時、バイト先の喫茶店で客として訪れたまだ若い父さんと知り合ったという母さんでもその娘を見たことがないという。

「少し、遠くにいるんだ」父さんはそれ以上のことは教えてくれなかった。

もし、本当にその人が居るのだとしたら、今の父さんの状態を知っているのだろうか。

一応、父さんに聞いてみるか。そう考え私はお盆にきれいな水の入ったコップを載せ、寝室へと戻った。

「父さん」寝室のドアを開け、すぐに駆け寄った私を母が、人差し指を口に当てて制した。

「少し、寝るって」医者は書類に目を通していた。恵子と太郎も、母さんに寄り添った優一も静かに父さんを眺めていた。私はコップをお盆をベッドの傍らの小机に置いた。

「・・・もう、日が落ちる」大きな窓から見る外は夕焼けのかかった深緑の景色だった。

「窓を、開けてくれるか優一」

夕闇の部屋に父さんの声が薄く響いた。

私達が一斉に父さんに視線を送ると「うん」と優一は足取り確かに窓に向かい、それを開けた。押し込むような軽鉄の音を立て、窓が外を見せようとするように大きく開いた。薄く風が吹き込んでくる。

「寒くありませんか」母さんが父さんの掛け布団を直した。

「うん、ありがとう」父さんが顎で私達を近づけようと促した。

四人、皆が父さんを囲んだ。医師が下がろうとしたが「君もいてくれないか」父さんがそう言い、医師は私達から一歩引いたところで留まった。父さんはまず医師に顔を向けた。

「この子と妻たちに伝えたいことは、今までの一緒の時間が伝えてくれる。だが、囲まれて終える人生はこれ以上ない幸せなことだ。この瞬間を迎えることができたのは君のおかげだ。ありがとう」そう言つて父さんは医師にお辞儀した。医師も深く頭を下げた。

そして私達を眺めた。

「優一、恵子、太郎、健一。君達は本当に私の人生を豊かにしてくれた。これからは自分たちの納得のいくようにやりなさい。無理のないように。一人一人が形の違う私の誇りだ」

ありがとう。穏やかな視線を私達一人一人に向け、父さんはそう言つた。

そして母さんを見つめた。

「えり。君と出遭えて私は幸せだった。君の存在が私の心を華やかにしてくれた。先に、上で待っていることになる。すまない。ありがとう」

父さんと母さんが手を取り合つた。父さんがそつと抱きしめ、母さんはその中で小さく泣いた。父さんが母さんを離したのは、母さんが泣き止んで少ししてからだった。

そして父さんが微笑んだ。私達を眺めながら、でもその焦点はもう少し上を向いているようでもあった。

そして、ひやり。

一陣のそよ風が私の背中をそよ撫でた。

そして窓から注ぎ込むように、部屋一面に霧が広がった。

気付いた時には視界は細かな飛沫に覆われ、部屋の灯りは薄まり、涼しさだけが確かな感覚だった。

霧雨だ。勢いが強い。目を薄め、拡がり渦巻くように流れ吹き上げる霧の中で私は皆の姿を探した。

大丈夫、だ。

父さんの声が聞こえたような気がした。

次第に霧はその勢いを無くし、視界がおぼろげながらも人のシルエットを捉えられるようになってきた。霧の満ちた部屋は、異質だった。

優一も恵子も太郎も確かに見える。二本の足で立ち竦む様子から察するに、無事なようだった。そして誰も、私も動かなかった。皆は一樣に父さんの寝るベッドの方を見やっていた。

目を向けると、ベッドの辺りは一層ぼやけて見えた。その一帯を覆う霧が部屋全体の中で特に濃いからだ。その灰暗い、霧の空間の中に半身をベッドからあげる父さんらしき黒い影が見えた。

「父さん……」

私は目を擦った。

その父さんの前、ベッドの端に子供のような黒い影が立っている。

長い丈のシルエットは着物だろうか。その影はじつと父さんと見詰め合っているように見える。

私は問うように近くにいた母さんを見た。母さんも皆と同じだった。ただ立ち竦み、奪われたような視線を霧の奥のベッドの父さんらしき黒い影に向けているだけだった。

私も視線を向かい合う二つのおぼろげな影に戻した。眼に全ての意識が向けられる。まるで、遠い世界の出来事のような、昔話のような目の前の霧の中の様子。

靄の中を揺らぐような、ベッドで半身を上げて動かない父さんの影、その左手がそと差し出された。何かをリード

するように。

ずっと待たせてすまなかった。

煙に包まれたような父さんの声がそう聞こえた。

・・・おつとつ？

女の子の幼い声が耳を掠めた。あの影がそう言ったのだろうか。

うん。

父さんの影がそう答えた。

父さんの娘……。小さく脆そうな少女の影がその記憶と一瞬重なった。

あ……。母さんが掠れた声を出した。見ると母さんの目から涙が流れていた。手で拭うこともなく、ただその影たち泣く目を向けていた。

少女の影が左手を伸ばした。そして不器用に、差し出された父さんの右手の平にのせた。

あたたかい

影の少女が両手を父さんの影の右手をそつと、いたわるように包んだ。

一緒にいてくれるか、メイ。

二人の影が手から繋がっていた。少女の影が僅かにその灰色の顔を父さんの顔に向けた気がした。うん。

滲んだような小さな声が、でも確かにそう聞こえた。

その瞬間、強い風と水滴が視界を襲った。

父さんと少女の影が部屋を舞う霧風に紛れ、私は視界を失った。私は薄く強い水飛沫に腕を眼に重ね、ただ待った。そして長い時間をかけず霧雨は去った。その代わりに今までの全てを吸いこんだように薄い闇が部屋を満たした。鮮明になる視界のベッドに父さんの姿は跡形もなく消えていた。

一切の動きの消えた部屋。

僅かに冷気を持つ水気が墨色に薄く周囲を漂っていた。

小さく幻想的な余韻。その空気は、微かに麦の匂いがした。